
ティアーズレイン (Tears rain)

クロネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティアーズレイン (Tears rain)

【Nコード】

N5086X

【作者名】

クロネ

【あらすじ】

戦局は膠着していた。

両国共に次なる一手を模索しあう中、ある兵器開発プロジェクトが動き始めていた。

戦争と言う大きなうねりの中で、それは一体どれほどの意味を持つのだろうか？

第0話 反撃の一步（前書き）

一応、縦読み推奨です。

出来る方はPDFで、PDFは無理でも縦表示のほうが読みやすい
と思われます。

第0話 反撃の一步

太陽系暦 0218年 9月

地球統一連合とヘルシャフト王国との間に開かれた戦端は、共に決め手を欠いたまま、既に2年の時が過ぎようとしていた。

そんなある常闇の宇宙^{うみ}を泳ぐ、一隻の船があった。

流線型の海洋生物を思わせる有機的なシルエツト。宇宙の闇に溶け込む黒い装甲板はまるで宇宙に浮かび上がる幽霊船を思わせた。

通称『ネビリム』と呼ばれる統一連合宇宙軍の新造艦だ。

「航行管制、船体各部異常ありません」

「観測部、周辺宙域に感、ありません」

「火器管制異常なしだ」

各部署からの定時報告を確認し、艦長のシェパードはふう、と息をついた。

白髪が目立ち始めた髪を掻き揚げ、彼は軍帽を被り直しす。

「順調ですね」

ふと、横から掛かった声に、シェパードは左へと首を向けた。

黒髪の短髪、やや青の混じった瞳。歳は20代前半といった頃のどこか少年の面影の残る顔立ちの青年だ。名をクレイン・ウィルロフ。その彼がこの場で浮いた印象を与えるのは、ただ単に軍服^{ひんふ}を纏っていないせいであろう。カジユアルなビジネススーツといった格好で軍艦の艦橋^{ブリッジ}にいれば浮くのは当然のことだ。

「ああ、順調過ぎて逆に心配になるがな」

「それは艦長が歳ってことでは？」

「ふん、言ってくれる」

「そんなに心配することはないでしょう。この船のステルス性はご存知の筈ですが？」

「あれはカタログスペックだろう？ 実戦でその能力を発揮できて

こそ、だと思うが？」

「ごもつともなご意見です」

答えクレインは艦橋を見回した。

正面の大型モニターには宙域図が映し出され、艦の現在位置を示している。それに向かい合うような形で様々な情報を映し出す端末が配置され、そのそれぞれにオペレーターが向かい合い、真剣な面持ちで艦の状況を管理している。その数は5人。それは非戦闘時とはいえ軍艦としては異様な少なさだった。

「どうだい、この艦は？」

徐にクレインは手近なオペレーターに声をかけた。

薄い紫色のショートヘアを揺らして、彼女は振り向いた。緊張がそれとも疲労か、あるいはその両方の混じった表情がクレインへと向けられる。

「ほとんどのことが自動化されているので、少し戸惑ってますね。操作自体はコンピュータの指示通りにやればほとんどできますし、でも揭示される情報が膨大で、それがちよつと……」

それはネビリムが最新であるが故のものだった。

少人数化と高性能化、そして効率化を追求した結果、生まれたのがネビリムだ。それを可能とするために艦の運用の大半はシステムによる自動制御が行われている。その結果通常の軍艦の半分以下にまで人員を削減することを可能としたわけだが、反面でこれまで分担してきたものを一人が背負うということにもなっていた。

計算や制御自体は機械が自動で行うが、その大まかな指示や、もっとマクロな視点での運用は人が行うのは変わっていない。それだけでなくアナログな部分はやはり人でなければ行えない。その部分において、この艦が一人に要求するスキルは非常に高い。

「なるほどね」

クレインは答え、内心で『あとで、あいつに伝えとくか』と決める。やはり、実際に運用してみないと分からないこともある。先進的なのはいいことだが扱えないのではどうにもならないのだ。

「艦長！」

やや上ずった女性の声が艦橋^{ブリッジ}に響いた。

「どうした？」

対するシェパードはいつもと変わらない落ち着いた声で答える。
声を上げたのは観測員の女性だった。

彼女……モニカ・レイムラットは、とても珍しく……このネビラムで唯一かもしれないロングヘアーの持ち主だった。一般的な観点からであれば別に長髪などめずらしくもなんともないが、統一連合軍では男女問わずどんなコースであっても最低でも半年は同じカリキュラムが組まれている。とうぜんこれには、肉体的にハードな科目もたぶんに含まれている。そのため、おのずと長い髪は邪魔になり皆切っていく、というのが自然な流れなのだが、そんな彼女は、その長い髪のまま、その肉体的にハードな科目を乗り越えてここに居る類まれなる人物だった。

「モニターに出します」

彼女は端末を操作すると、それを正面のモニターに映し出した。

「熱紋照合及び画像解析の結果、間違いなくHCM-05 ベリゴルだと判明しました」

画面に映っていたのは、やや荒めの画像。だが、特徴的な背中の大きなランドセルのような装備と平たいレドーム状の頭部がベリゴルの偵察用のタイプであることを示している。

彼女の話によれば、周辺の警戒と遠隔偵察用のUAVのテストを兼ねた哨戒行動中にたまたま発見したのだという。

「こちらが捕捉されたか確認できるか？」

割り込んだのはクレインだった。

「正直、正確にはちよつと……」

そう言つて、モニカは端末の画面へと視線を落とした。

「ですが、現在この艦から遠ざかっているのは間違いありません」
言つてモニカは正面モニターの情報を切り替える。

「艦長」

「うむ……」

口元に手を当て、まるで考える人のようにシェパードは逡巡し判断する。

「捕捉されたにせよ、されてないにせよ。はつきりと分らないのなら捕捉されたとして動くべきだろう」

「具体的には？」

答えを分かっているかのような口ぶりで先を促すクレイン。

「迎え撃つ準備をする、奴等が先に捕捉していたとすると、当然奇襲を狙うだろう。そこを万全の体制で迎え撃つ。それだけだ」

シェパードは直ぐに第一種戦闘配置を命じた。

アナウンスが流れ、待機中だった乗員たちが一斉に所定の配置へと移動していく。たちまちのうちに艦内は慌しくなり、艦内の空気が張り詰めていく。

「ですが艦長、一体どう迎え撃つのでしょうか？」

そう問いかけたのは薄い紫色のシヨートヘアのオペレーターだった。

「この船はあくまでテスト航海をかねた新型機の輸送とその開発責任者の護送であって、艦載機もパイロットもいないんですよ」

やや悲壮感の滲んだ声色だった。

いまのままで行けば間違いなく戦闘になる。そして今のネビリムの状況をたとえるなら、艦載機のない空母が単独で戦闘を行おうとしているようなものだ。一応、最新鋭の装備を各種取り揃えてはいるが、その性能を誰一人として実際には知らないのだ。それは丸裸で敵陣に突っ込むような無謀極まりないことのように捉えることも出来る。

「大丈夫だ」

静かに、言い聞かせるようにクレインは言った。

「艦載機もパイロットもここにいる」

「いいのかね？」

「いいものにも、最初から頭数に入っているのでしょうか？」

「彼女の許可は？」

「それなら……」

言いかけたところで艦橋^{ブリッジ}のドアが開いた。

「問題ないわ」

金髪の少女が艦橋^{ブリッジ}へ入るなり言い放つ。

「だ、そうです」

「よろしい」

艦長がうなずき、脇の艦内電話を取った。格納庫へ指示を出しているようだ。

「え、ということですか？」

そんな中、状況の飲み込めていないその女性だけが取り残されている。

「あなた、名前は？」

「リターナ、です」

金髪の少女がずいつ、と詰め寄り、リターナはたじろいだように距離をとる。

「OK、リターナ。いま輸送中の新型^{あれ}のテストパイロットはこいつ
びしつ、とクレインへと指を指す。

「理解できた？ 出来たわよね？ 出来なきゃしなさい！」
言い切つて、少女は艦橋^{ブリッジ}を後にする。

「クレイン、あんたはこつち」

人差し指で、こつちへ来いというサインを出しながら小さい背中
がドアに消える。それを追うようにクレインもまた艦橋^{ブリッジ}を後にする。

「艦長、俺はこのまま機体の方に」

「ああ、何かあれば連絡する」

「ま、何事もなければいいんですがね」

「まったくだ」

ドアがぴしゃりと閉まり、クレインは息を吐いた。

「本当にいいんだな？ アリサ」

振り向きながらクレインが問いかける。

「良いも悪いも言っていていられないでしょ？」

視線の先には、先ほどの金髪の少女がふて腐れた表情で立っていた。

「それはそうだが……」

頭を掻きながらクレインは言葉を搜した。

「なによ？」

「いや、もう少し拒絶するもんだと思ってた」

「仕方ないじゃない。あれは兵器。人を殺す道具なんだもの」

「……」

言葉に詰まるクレインにアリサは歩み寄る。

「あんたの言いたいことは分かっている。でもこの艦を守れるのはあれとあんただけ。だから……」

アリサの表情が明るいものへと変わる。

「壊したりしたら、承知しないんだから！」

「ああ、行ってくる」

「帰ったらちゃんと戦闘データ持って来なさいよ！」

アリサの凜とした声に背中を押されるように、クレインは廊下を進み、格納庫へ繋がるエレベータへと乗り込んだ。

「さて、一仕事と行きますか」

クレインは宣言し、目的地へとついた扉を潜った。その先はパイロットの待機室になっており、ちよつとしたラウンジのようでもある。広いガラス張りの壁の向こう側では整備士達が動き回っているのが見て取れた。

彼等と傍らに佇む自らの愛機を一瞥してクレインはそのまま隣の部屋へと進んだ。隣は更衣室とシャワールームになっていた。一瞬、パイロットスーツを着るべきか悩んだが、いざと言うときのためにも着ておいたほうが断然いいと考え、慣れた手つきで手早く着替えをすませた。

コックピットで待機しようかとも考えたが、本来予定のない稼動に整備士達が調整に追われている様子であるためもう少し待ってか

ら行こうと決め、ドリンクのボタンを押す。

宇宙用の密閉容器に入ったドリンクを片手に椅子へと腰を下ろす。
「悪い知らせだ」

艦内通話がシェパードの言葉を伝え、クレーンはため息をついた。
やはり捕捉されていたらしい。いくらステルス性に優れているとはいえ存在そのものを完全に隠せるわけではない。

「敵の陣容はどのくらいで？」

「今のところフリゲートクラスが2隻。ただの偵察艦隊ならこんなものだと思うが」

「フリゲートクラスと言うことは艦載機は6機ですか」

「その内、1機はさっきの偵察用だとすると、戦力は最大で5機ということになる」

「船のほうは任せても？」

「何とかしよう」

「会敵予想は？」

僅かな間。恐らくモニカあたりが正確な計算をしているのだろう。

「今の速度を維持すれば、およそ15分です」

艦内通信からモニカが答えた。

「了解。機体の準備が整い次第コックピットで待機します」

答えて、クレーンは通信を閉じた。

「班長、準備はどうなっている」

クレーンが通信を閉じた後も、他の部署とのやりとりは続いていた。
た。

「現在戦闘用に換装中、7分で終わらせます」

「火器管制はどうか」

「FCS《火器管制システム》チェック、問題ありません。現在、全兵装ステータスを実働モードに切り替えています。終了まであと260」

「ダメージコントロール班の配置及び各ブロックの隔壁閉鎖完了し

ました」

「機関出力戦闘状態へ上昇中」

同時に各部署の報告が次々と伝えられ、着実に戦闘体制が整えられていく。

「初陣にしては皆よくやっています」

その言葉を発したのは艦長の隣に立つ初老の男だった。

実際の年齢的にはシェパードと同年代であるが、老眼鏡と顔のやや深めの皺がやや老いを強調している。

彼の名はダリル・ブラッドマン。シェパードとは昔からの友人であり、今も副艦長としてネビリムへと乗り組んでいる。

「ダリル、まさか再び君とこうして戦場に出るとはあの時は考えもしなかった」

「それは私もです、艦長」

プライベートであれば名前で呼び合う中であるが、しっかりと公私を分けるところがダリルの性格を思わせる。

「1年前、我々は多くのものを失いました」

「戦友と部下、そして家族」

低い声で口にして、シェパードは首のペンダントを握り締める。

「老兵がただ去り行くだけではないと、見せ付けてやりましょう」

ダリルの言葉にシェパードは頷きで答え、正面のモニターへと視線を移した。

「敵艦、なおも接近中。進路、速度そのまま」

「機関戦闘出力へ、各部異常なし」

「FCS《火器管制システム》オンライン」

艦載機を除いたネビリムの準備が整い。皆がシェパードの次なる言葉を待った。

「ネビリム、戦闘体制へ移行」

その言葉が合図となって、まるで弾かれたようにオペレーターたちが慌しく端末を操作していく。今までは全て下準備。ある意味ではここからが本番だった。

「各部VLS《ミサイル発射システム》、L1からL6およびR1からR6ヘイジナス装填、L7、L8およびR7、R8ヘトールハンマーを」

「CIWS、RAM起動完了、FCS《火器管制システム》連動中」
「ATCS《外部装甲排熱システム》稼動開始」

「敵艦、加速を開始。到達誤差 - 310。針路そのまま」

一気に潰しに掛かるつもりなのか、それともこちらの思惑に気がついたかは定かではないが、敵艦はまっすぐにこちらへと向かっていった。

「格納庫より、機体の最終調整が終了。パイロットも搭乗済みだそうです」

「直ちに発進準備にかかるように伝え」

オペレーターがそれに応え、発進シーケンスを管制官へと引き継いだ。

「そういうわけで管制を担当します、ミラ・シエスタです」

その少女の声をクレインは狭いコックピットで聞いていた。

「よろしく」

「はい。こちらこそ」

屈託のない笑顔で応えるミラ。その印象は一言で『若い』に尽きる。

それもそのはずで彼女はまだ14歳なのだ。くわしい経緯は秘匿されているが、統合軍本部からのお墨付きだそうで、半ば強引にこのネビリムのクルーとなつて乗り組んでいる。

「敵艦より熱源の放出を確認。数は6。CMだと思われます」

観測員が報じ、レーダーへと光点が増える。

「偵察機も出してきた？」

「分らん。だが、やるしかないだろう」

クレインの疑問にシェパードが答える。

「確かに。囲まれる前に数を減らします」

「了解した」

シエパードはクレーンとの通話を切り、艦の指揮へと戻る。

「そういうわけで、発進頼めるかな？」

「了解です！」

ピンクの髪をふわふわと揺らしながらミラが応えた。

「VDT-00 発進位置へ」

機体の肩を拘束具が掴み、機体をカタパルトへと移動させる。

「気密隔壁閉鎖。リニアボルテージ上昇。システムチェック、オールグリーン」

「試作のライフルがぎりぎり間に合った、武装コンテナ02だ。もつていけ！」

割り込んだのは整備班の班長だった。

「グッジョブだ班長」

「ただ粒子のチャージがほとんどできてねえ、弾切れにだけは気をつけてくれ」

「了解」

そんなやり取りの中で、ミラは着実に発進のシーケンスを進めていた。

「ハッチ開放。進路上に障害物なし。射出コントロールをパイロットへ」

「コントロール確認。VDT-00《シュタール》発進する」

宣言し、彼は思いつきリットルレバーを引いた。

ぐつ、とシートに強く押し付けられる感覚と共に、周囲のディスプレイに映る光景が艦内から漆黒の宇宙へと切り替わる。

「針路を116へ」

「了解」

短く、無線用語で答えクレーンは機体を転進させた。

CM(cavalry module)は西暦から太陽系暦へと移り変わるころに発明された人型の戦術機動兵器だ。もともとは宇宙開発用の工作機械だったものが戦闘用に転用され、爆発的な普及をみせた。本来の目的どおり宇宙開発にも貢献し、現在では地上、

宇宙問わず幅広く運用されている。

クレインの駆るCMはその第5世代に相当するワンオフ機だ。先進技術のテストベットとして開発され、今後は次世代機同士のデータ収集を目的とした模擬戦用として配備される予定だ。

スマートな外装は暗めの灰色に塗装され、間接部は黒色だ。頭部には多目的アンテナの役割を果たす突起物と双つの碧眼が闇を掻き分けるように点っている。

星の瞬く海を駆け抜けるように突き進む中、クレインは機体の状態を示す右下のディスプレイに目を走らせた。

プリフライトチェック（発進前に行う機体の状態確認）では問題がなくても発進後に不調を起こすケースは少なくない。加重やスラストの熱。各部の駆動による微妙な変化も精密なCMにとってはストレスになる。無論、そう簡単に故障するものでもないが、確立は0%ではない。

「全て正常、問題はないな」

幾つかの画面を切り替えながら手早く、確実に機体の状態を把握する。班長の言っていた通り試作型のビームライフルの粒子残量はあきらかに少ない。目盛にして3つつ分だ。

「無駄撃ちしている余裕はねえな」

呟いてクレインはライフルのモードをSLへと変更した。

ライフルの銃口から銃身の半分が口をあけるように開き、内部のパーツがスライドし銃身を延長する。通称ACBR（Adaptive Combat Beam Rifle）適応性のあるビームライフルと呼ばれる機構で、単一の武器で長距離から近距離までをカバーしようと考えられたものだ。ビームのチャージサイクルと銃身による収束率を調整することでこれを可能としている。モードSLはセミロングの略称で連射性を抑える反面、射程距離を高め、中、遠距離に対応したモードである。

その間も機体は、敵との距離を瞬く間に縮めていく。

『capture the enemy』

ディスプレイにその文字が表示され、光点がマークされる。

「V1、エンカウント」

同時に管制官のミラが艦内で報じる。なおV1とはVictor 1の略でありクレインのコールサインだ。

「先手を撃つ」

クレインはオートではまず当たらないと判断し照準補正をセミアクティブに切り替える。これはオートに手動で補正をかけるもので（手動にオート補正をかけるとも言える）ある。光点のベクトルを元に勘で修正を加えクレインは操縦桿のトリガーを引いた。

パツと光が銃口から放たれ、瞬く間に消え去る。

結果は外れだ。

しかし光点の動きから動揺が見て取れた。

今までの常識からすればCMの出力ではビーム兵器をを携行することは不可能だとされてきたからだ。

機体の大きさという制限上、搭載できるジェネレータの出力にも限界がある。そのため現在までビーム兵器を運用できるのは艦船クラスにのみ限られていた。この常識は絶対的なものとして2000年間のあいだ信じられてきた。

だが、いまその常識が目の前で破られたのだ。

敵機は2手に分かれて編隊を組んでいた。おそらく、一部隊が船へ向かい、もう一方が足止めないしクレインの機体を撃破する算段なのだろうが、そうそう思惑通りにいかせはしない。

「いつまでも、やられっぱなしって訳にはいかんのでね」

呟き、クレインはペダルを踏み込んだ。ターゲットは船を目指していると思われる敵機だ。

Gが身体を圧迫し、シートへと押し付ける。だが、彼は愚直なまですぐに敵機へと迫っていく。

当然、それに気づいた敵機がライフルを構え、迎撃の意志を見せる。

HCM-06 ベリアル。ヘルシャフト公国の主力CMで重厚な

フォルムと各部に搭載されたスラスタを持つダークグリーンの単眼の機体だ。

『warning』

ロックオンされたことを示す文字がディスプレイに表示され、コックピット内にアラートが響く。だが、クレインは進むことをやめたりはしない。

敵機のライフルが光を放ち、高速の弾丸をフルオートでばら撒いた。それは毎秒10発の弾の雨。

だが、クレインの機体はその雨を、まるで曲芸飛行を行う航空機のようにして掻い潜っていく。それは驚きか、恐怖か、僅かに敵がたじろいだように見えた。

「まずは一機」

クレインは無慈悲にトリガーを引いた。銃口から光線が放たれ、敵機へと吸い込まれるように命中する。数十万度にも達する熱エネルギーを受けたベリアルは、内部から膨らむようにして爆散し、虚空の闇へと散る。

爆炎が灰色の機体を赤く照らし、彩る。

その様を一瞬、呆然と見ていた残りのベリアルたちであったが、直ぐに立ち直った様子で機動を再開する。どの機体も無駄のない良い機動だ。

「手だれか、面倒だな」

いいながらもクレインの表情には余裕が見て取れた。

先ほどのクレインの動きを見てか、敵は船への攻撃を諦め、クレインへと全力を注ぐつもりのようだ。

敵は取り囲むように一定の距離を保ちながら展開し、牽制射撃を繰り返す。

多方位から放たれる射撃をかわし続けるも、弾薬に不安のあるクレインは満足に反撃が出来ない。

「ッ！」

それは一瞬の隙だった。だが、同時に致命的な隙でもあった。

敵機はスラスターを最大で吹かし、一瞬でシュタールの背後へと肉迫。左手で腰部のウエポンラックから戦術重装鎧を引き抜き、そのまま振り下ろした。

肉厚の刃が縦に走り、虚空を切り裂く。

『バカな！？』

そんな敵兵の声がクレインの脳裏にこだまする。無論、それはただの錯覚に過ぎない。

振り下ろされた刃は、あるはずの衝撃も、感触もなく、ただ無為に虚空を切り裂いていた。

クレインはわざと隙を見せたのだ。それを理解してか、放たれる2撃目には動揺が含まれているように見えた。2撃目は振り下ろした腕を戻す返しの一撃だ。

刹那、光刃が煌き、振り上げたベリアル肘から先の部分がはじけ飛ぶ。

咄嗟に敵は後退しながら右手のライフルをシュタールへと向けた。刹那、銃口が瞬き、弾丸が放たれる。

「2機目！」

斬線は横。シュタールは身をかがめるように射線を避け光刃を振りぬく。ベリアル分厚い複合装甲を容易く引き裂き両断する。

爆発は起こらなかった。二つに分かれたベリアルは真空の海を漂うように動きを止める。

シュタールの手に握られていたのは収束されたビームの刃。数十万度にも達する熱エネルギーを秘めた刃だ。

警報。アラートが鼓膜を打ち、刹那の差で火線が空を切る。たった今切り裂いたベリアルに命中。推進剤にでも引火したのか、一瞬で炎球へと変わる。止まるな、動き続ける。それが戦闘中の鉄則だ。クレインはペダルを踏み込み、右手で操縦桿を操作しながら、左手でディスプレイ画面を操作していく。

シュタールの特徴はビーム兵器の運用能力だけではない。それを運用できるジェネレータ出力。それは推進力としても活用できる。

しかし、普段は機密保持のためにリミッターがかけられている。

「テストモード、リリース」

パスコードを打ち込み、それは完了した。

高まる駆動音。上昇するジェネレータ出力。シユータルにかけられていた軀くみきはいま外された。

リミッターを外したのは決して劣勢だった訳ではない。この戦いの中でクレインはシユタルの全力を

試してみたいと、ただ純粹に思ってしまったのだ。

全力を開放したシユータルは文字通り流星の様であった。

スラスターの燈を煌かせ、シユータルは闇の海を縦横無尽に機動する。

ベリアルベリアルの放つ火線を巧みにかわしながら、間隙を縫って距離を詰める。オート制御の照準がシユータルを追うように追尾する。だが、その焦点が定まることは一瞬もない。銃口から吐き出される弾丸は無為に闇へと吸い込まれ消えていく。

衝突するのではないかという勢いで接近する機体をクレインは逆噴射による急制動と四肢の動きを使った機動制御術《mobile control art》で押さえ込み敵機の頭上へと舞い上がる。

「これで半分」

光刃を振り下ろし、ベリアルが肩から切り裂かれる。部品をオイルを推進剤を内臓のようにぶちまけながら、ベリアルは沈黙する。

警報。

「ミサイルか？」

回避運動を取りつつ、クレインは発射主を探してディスプレイを見回した。

「こいつか」

残り3機中でもやや遠い位置に、まるで2機に守られるように後方に位置する一機のCM。背中には特徴的な大型のランドセルが見て取れた。

HCM-05 ベリゴル。先ほどネビリムを捉えたと思われる偵察機だ。だが、よく見れば装備がわずかに変わっている。偵察用のセンサーを搭載したランドセルではなく対艦攻撃用のミサイルパッケージを装備している。

発射されたミサイルは4発。全て対艦攻撃用の大型ミサイルだ。高い火力を持たせるために大型化した対艦ミサイルは機動性に長けるCMの攻撃には向いていない。だが複数発を上手く使えば撃墜も可能だ。高い威力の対艦ミサイルが命中すればCMなど一撃で鉄くずと化する。

クレインはシュタールの頭部に装備された18mmCIWSを起動させた。毎秒50発を吐き出せるこの装備は、敵航空機やミサイルの迎撃などを想定したものだ。濃密な弾幕の形成がその役割で、CMや艦船など比較的装甲の厚い目標には火力不足である。だが、高い連射性と高い弾頭の貫通能力はミサイルの迎撃に大きな力を発揮する。

閃光が瞬いて無数の劣化ウランの弾が吐き出されていく。右下のディスプレイに表示された残弾を示すカウン트가瞬く間に減っていく。

1発が命中。だがそれだけでは足りない。さらに2、3発と次々にミサイルへと弾丸が穿たれる。火花が散り、制御が利かなくなつたミサイルはバランスを崩し、きりもみ爆散する。その爆炎を突き抜けて、2発3発とミサイルが迫る。だがそのこと如くをばら撒かれた弾雨が弾くように、穿ち、砕いていく。

爆発は連鎖的に起こり、朱色の光がシュタールの装甲を彩つた。最後の1発がその炎光えんこうを突き破るように表れシュタールへと猛進する。

爆発の熱量にまぎれていた為か、熱センサーでも捉えられなかったようだ。

だが、対艦ミサイルは威力こそ高いが、旋回性や追尾性は低く、振り切るのは難しいことではない。

警報。

「……ッ」

決して存在を失念していたわけではない。だが、これは少々予想外でもあった。

残ったベリアルの中の1機が前下方行からシュタールとミサイルの間にわ接近していたのだ。だが、これは一歩間違えば味方のミサイルに巻き込まれてしまう危険性がある。巻き込まれないように、ミサイルのIFF《敵味方識別装置》が作動していればミサイルは不発となり意味を成さない。

「これが狙いだった？」

呟いて、クレインは確信した。ミサイルは全て囷。撃ち落されることも計算していたのだらう。さらに警報。アラートがけたたましいほど鳴り響く。

残ったベリアルが背後から姿を現す。対艦ミサイルはロケットモーターの駆動を停止。宇宙の只中に漂う形となる。

正面と背後に敵。

挟撃される格好となったシュタールに猛然と迫る2機のベリアル。クレインは躊躇わず機体に急制動をかけ、四肢を降って機体を宙返りさせる。ディスプレイに映る景色が反転し、シュタールは虚空を蹴るようにして、加速した。

一瞬で反転したシュタールに、敵は意表を突かれたようだった。待ち構えるような動きをみせていた背後の1機はあわててスラスタを吹かし、前方の1機は戦術鉈を慌てて引き抜く。シュタールの左腕から内蔵された剣柄がスライドし、それを掴み取る。光が伸び、刃を形成すると同時に2機は交差した。火花とスパークが走り、2機を一瞬だけ照らし出す。

振り返りながら、ベリアルが半ば溶解した戦術鉈を投げ捨て、ライフルを構えた。シュタールも右手のライフルをベリアルへと向ける。

発砲は同時。

ライフルから放たれた徹甲弾は、シュタールの放った光線に包まれ、蒸発。そのままベリアルへと命中し、ベリアルを貫いた。

数瞬の間を置いて、爆発が起きる。その中からもう1機が突き破るようにして表れる。クレインはもう一度トリガーを引いた。銃口に光が灯り、発射される。数秒遅れてクレインの舌打ちがコックピットに鳴り、クレインは左手の光刃を構える。

掠めるようなギリギリのタイミングであるが、ベリアルは確かに光線を避けていた。

接触。ベリアルは右腕が肩から切り落とされる。だが、それでも敵の動きは止まらない。右腕を犠牲にした、一撃目の縦切りから、今度はなぎ払うような二撃目を放つ。それをシュタールは宙返りでもするかのように回避、光刃を突き出した。

咄嗟に敵は逆噴射をかけて後退。胸部を光刃が挟り取る。火花とスパークを零しながらも敵機は戦術鉈を振り上げる。

「いい戦いだった」

シュタールのライフルが光を放ち、糸の切れた人形のように敵機が沈黙する。

ふう、と息を吐きながらクレインは遠ざかっていく最後の光点に狙いを定める。

『mode long range』

ライフルのモードを長距離狙撃用のモードへ切り替え、トリガーを引いた。

光弾が放たれ、遠い場所で光が膨らんだ。

周辺の索敵を手早く済ませ、肩の力を深い吐息と共に抜く。暫くの間、敵の残滓を見つめながら張り詰めた緊張をほぐしていく。

通信機のスイッチを操作し、ネビリムへと回線を開く。応答を待つ間に、パイロットスーツのヘルメットを脱ぎ、頭を振った。

「V1より、ネビリムコントロール」

「こちら、ネビリムコントロール」

通信がつながりミラの顔が上部の小型モニターに映った。どこと

なく強張ったように見えるのはネビリムが戦闘中であるためだろうと察し、クレインは報告する。

「敵機動兵器群を殲滅。これより帰艦したいが、援軍は必要か？」
「いらん」

簡潔に、しかしそれでいてはつきりとした口調でシェパードが答えた。

「この程度なら問題ない」

「了解」

クレインが答えると、シェパードは回線を切った。

「損傷はありませんか？」

「無傷だ」

「了解です。ご苦勞様でした」

「ああ、これより帰艦する」

言ってクレインは通信を終えた。

「シグナル確認、着艦誘導を開始します」

およそ十分後、クレインはネビリムへと帰艦していた。外から見る限りネビリムに損傷はなく、無事に戦闘を終えたようだ。シェパードの指揮とネビリムの性能に改めて感謝しつつ、開いたハッチから伸びる誘導灯へとシユタールを進ませる。

「同期確認、機体制御をオートモードへ」

「了解、コントロールをネビリムへ」

機体の制御がコックピットからネビリムの遠隔制御へと切り替わり、シユタールは自動的に格納庫へと収められていく。こうなればパイロットはもう必要ない。

シートベルトを外し、幾つかの操作を行って、コックピット بروツクのハッチを開放した。ディスプレイの映像ではなく、肉眼での景色が視界に飛び込む。雑踏とした、それでいて生き生きとした光景が広がり、人と汗と油の入り混じった、格納庫独特の臭いが鼻腔

へと侵入する。それでも軍艦としてはまだ遙かにマシなほうだ。

「無事だったみたいだな」

不意に背中を叩かれ、クレーンはむせ返りそうに鳴りながらも、
「ああ」

と、短く答え、振り返る。

蓄えられた無精髭。ぼさぼさの髪。色あせた作業服に身を固めたおっさんが浮かんでいる。ネビリム整備班のダグラス班長だ。ネビリムでは一部の区画で重力制御が行われているが、格納庫はその例外の一つだ。

「整備と戦闘データの抽出を頼みます」

「わかってらあ！」

かれた声で応えるダグラスに一礼しクレーンは格納庫を後にする。

「ご苦労さん！」

退室していくクレーンの背中にぶつきらばうで温かい一言が投げられる。

扉が閉まり、ロックが掛かる。そこは、狭く短い廊下のような一室。重力の緩衝区画と呼ばれる場所だ。空気の抜けるような音と共に、身体へと負荷がかかり足が床へと触れる。

加圧作業が終わり、前方の扉のロックが解除され、クレーンは扉を抜けた。

「おっ」

思わぬ衝撃にクレーンは後ずさりした。

「ただいま」

言って、視線を下へと動かすと、金髪の少女が抱きついていてる。

「平気だった？」

涙声でアリサが尋ねる。

「損傷なし、かすつてすらいない」

「違う、あんたのほうを言ってるの！」

パツと離れ、涙目で睨みつける。

「大丈夫。俺も無傷だ」

言い聞かせるように、優しい口調でクレインは言った。

「当然よ……ばか」

目じりに滲んだ涙を拭いながら後ろを向くアリサ。

「心配かけたようだな」

「当たり前でしょ……」

拭い終えたのか、アリサは振り返る。

「あんたまでいなくなったら、私は親友を二人も失っちゃうじゃない……」

「そうだな、俺は死ねない。死ぬわけにはいかないんだ」
クレインの言葉には何かしらの強い意志が感じられた。

「あんた、まだ信じてたの？」

驚いた様子でアリサが尋ねる。

「俺がアイツのことを諦めるとでも？」

「……てよ」

肩を震わせながらうつむき、先ほどとは打って変わったように緊迫した空気が張り詰める。

「いい加減にしてよ！」

アリサが声を荒げ、数瞬の静寂が訪れる。

「わからないの！？ あの子はもう死んだのよ！」

その叫びを打ち消すように、クレインの拳が壁を叩く音が部屋に響いた。

「俺は、諦めない」

言い捨てるようにクレインは部屋を後にする。その背中には、どこか寂しさが滲んでいるようだった。

「私だって……信じたくはないよ……」

一人になった部屋で呟いたその言葉は、クレインの耳に届くことはなかった――。

「彼女と喧嘩でも？」

数日後、新型機のことでも聞きたいことがあると、艦長室へ呼ばれたクレインに、シェパードはそんな言葉投げかけた。

「いえ、それにあいつは彼女なんかじゃりませんよ」

「そうなのかね」

「ええ、ただの幼馴染。親友です」

簡潔にクレインは答える。まるで、この話題を早く終わらせようとでも言わんばかりの意図を含ませて。

「狭い艦内だ。些細なことでも耳に届く」

クレインは沈黙を保つ。

「別に君たちの間に割って入ろうというのではない。だが、やはり気にはなる」

「ご心配は感謝します。ですが……」

言いかけて、その言葉はシェパードに遮られた。

「気にすることはない。だが、これだけは覚えておいて欲しい。君が彼女のことを忘れないようにすることで前に進めるように、割り切ることで前に進める人間もいるということも」

クレインは何も答えられなかった。艦長が原因を知っていたことに驚いたこともある。だが、それよりも自分がアリサの思いを考えなかったことに驚いていた。答えられないまま、クレインは艦長への報告だけを済ませて退室する。

「……！」

何の偶然か、扉を出た先に立っていたのはアリサだった。どうやら、彼女もまた艦長への報告があるらしく、胸の前で幾つかの書類を抱えている。

互いに無言のまま、クレインがそこをよけアリサは扉の前へと進む。

『割り切ることでも前に進める人間もいるということも』

ついさっきのシェパードの言葉が脳裏に甦る。

「悪かった……」

独白のような、か細い声でクレインは言った。

「だが、俺は信じることをやめれない。そうしなければ進めないんだ……」

クレインの振り絞るような言葉に、

「私も……ごめん。クレイン——信じてあげて、信じ切れなかった私の分まで」

「言われなくても、な」

「そっか、そうだよな」

「また……あとでな」

「うん。また後で」

そう言っで、2人は分かれていった。

第0話 反撃の一步（後書き）

ほとんど思いつき小説です。文字数多い割には物語りは進みません（笑）

へったつくそかもですが感想とか指摘とかくれると号泣して（たぶん実際はしませんが）喜びます（こっちはまじです）。

まだ中途半端なのでまた、非公開設定にしちゃうかも？（てかできるの？）

読んでくださった方ありがとうございました。また来てくれると嬉しいです。

追記

書きかけのをそのまま公開設定しちゃったので、見直してませんでした……変な部分がいくつかありますが節目節目で修正をかけていくのでご容赦ください。

さらに追記

ミスって短編にしてましたので連載に切り替えました……絶対、短編では終わらないのです……

追記、この後書きが最後かも？

これにて0話、完結です。まだ続けても良かったのですが、なんとなくここで終わらせることにしました。あと、序章から0話へ変えました。なので次は第1話となります。ちょっとずつ更新していきますので、また読みに来てくださると嬉しいです。ではノシ

第1話 拮抗の崩壊（前書き）

PDF及び縦読み推奨です。

あと今回からキャラ紹介を入れる事にしました。

スウェン・カールスレント

この物語のメイン主人公。19歳。

寡黙な性格で、感情を面に出さないようにしているが意志はしっかりとしている。紛争孤児であり、軍に保護されそのまま兵士として育てられた過去を持つ。リベリオンの専属パイロット。

クレイン・ウィルローフ

本作の第2主人公。24歳。

シユタールのテストパイロット。宇宙軍の人員不足からネビリムの護衛も兼任していた。何でもそつなくこなすが、実は射撃戦が得意。開戦当初に恋人が行方不明になり、今でも生存を信じ続けている。

アリサ・バーミリオン

本作のヒロイン的な女の子。24歳。

一言で表すと超がつくほどの天才。父の死後、軍需産業であるバーミリオン・デイフェンシブ・テクノロジース（以降VDT）を引き継ぎ社長となる。また、シユタールやリベリオンを開発した責任者でもある。クレインの恋人であった女性とは大親友であり、クレインとは逆に死んだと思うことで過去を断ち切っている。

第1話 拮抗の崩壊

——およそ2年前。

太陽系暦216年 統一連合宇宙軍 月本部

広い映画館のような一室に乾いた音が一つ響いた。

そこにいたあるものは驚愕に目を見開き、あるものは両腕で頭を覆い隠しながら怯え、またあるものは視線をそらした。

ずしんと鈍い音を立てて、男が倒れる。胸には一発の銃創が穿たれ、赤い鮮血が床へと広がっていく。

「申し訳ありません閣下」

淡く透き通る青の髪を靡かせて、そのコートに飛んだ血をふき取った。その手には拳銃が握られ、火薬の匂いを放っている。

「諸君、聞いて欲しい。たった今、統一宇宙軍の全指揮権は私に移った。あの忌々しい侵略者どもを追い払うべく、私は皆に助力を願うほかない。どうか、勝利のためにみなのを！」

長身の男が高らかに言い放つ。その優麗な顔と鋭くも冷酷な瞳には自信が満ちている。その傍らには、物言わぬ骸となった前指揮官が転がっている。その光景が、誰もが彼の言葉に賛同するほかないということを示しているかのようでもある。

実際、誰一人として彼を糾弾するようなことはなかった。骸となった前指揮官は人格的に問題が多かった。セクハラや差別に侮蔑は日常茶飯事で、気に入らなければ権力を盾に暴れ、怒り狂う。なぜ彼が統一宇宙軍の司令官になれたのか、疑問に思うほど彼は無能だった。それを討った男は英雄のように映ったのかもしれない。そうして彼は、瞬く間に宇宙軍の全権を掌握したのである。

そして……

太陽系暦 218年 9月 統一連合宇宙軍 月本部

「時が訪れた、奴等に鉄槌を下すこの時が——」

男は笑っていた。それは悪魔のような不気味なものだ。

「——奴を呼べ」

インターホンに告げ、彼は再び笑い出す。悪意に満ちた顔で……。

太陽系暦 218年 9月末 ヘルシャフト王国 首都ハルファス

「威力偵察任務中のフリゲート2隻が消息を絶ちました。現在、原因を究明中です」

跪いた姿勢で中年の男が報じる。

そこは豪華な作りの一室だった。男の前方には玉座があり、そこへと伸びるのは一直線の赤い絨毯だ。中世の謁見の間を忠実に再現したその部屋には、跪く男のほかに数名の近衛兵と威厳に満ち溢れた若い男が鎮座している。

シュバルツ・フォン・ヘルシャフト。その名が示す通り、この男こそがこの国を治める皇帝である。

煌びやかな装飾の施された白い礼服に身を固めたシュバルツは、眉一つ動かさず逡巡した後、男へと命じた。

「第3機動艦隊、それと白狼ヴァイスヴォルフ（Weiß wolf）を使い」

男は驚いてその頭を上げた。

「この消失には間違いなく何かある。全力を挙げろ」

重ねられた命令に男は深々と頭を下げ、去っていった。

『ついに動き出したか』

彼の思考には確かな確信があった。偵察艦隊の消失。これは恐らく始まりに過ぎないということ、そしてここからが本当の戦いだということ。

太陽系暦 218年 10月初頭 統一連合宇宙軍管轄区 コロ

二ー ロノウエー

常闇の宇宙を目まぐるしく行き交う2つの光点があった。

それは複雑に動き、時にぶつかってはまた、複雑な移動を繰り返している。

『warning』

警報がコックピットに響き、ペダルと操縦桿を動かす音に舌打ちが続く。

「……ッ！」

クレインは奥歯をかみ締めながらフットペダルを踏み込んだ。スラストが唸るように推力を上げ、機体を加速させる。Gによってシートに押し付けられながら、シユタールの左腕に握られた光刃を振り下ろす。

だが、目の前にいたもう1機は宙返りしてそれを回避。間隙を縫って抜刀。抜かれた光刃をシユタールの胸に目掛けて降りぬいてくる。デイスプレイいっぱいに光が広がり、瞬間、全てが途絶えた。

「テスト終了。パイロットは退乗してください」

プシュウという空気の抜ける音と共にボール状のそれが口をあけた。

「お疲れ様です」

声と共にドリンクが差し出される。クレインはそれを受け取ると、渡してきた女性職員に尋ねた。

「結果は？」

「上々です。正確なデータはまだですが、リアルタイムのほうでは十分でした」

「そうか。なら次は射撃のほうをテストしたい。準備を」

「わかりました」

一礼し、女性職員は去っていく。その背中を見送ることもなく、クレインはもう一台の方へと歩き出した。

「お疲れ」

クレインはシミュレーターの脇に立つ少年に声をかける。

やや長めの黒髪に、感情の薄い面。しかしそれでいてクレインへと向けられる黒い瞳には確かな意志が宿っている。

「どうだい？」

「どうと聞かれても、答えに困るのですが」

「機体のことだ」

「驚くべきものかと」

「そりゃそうだ」

「だからこそ、なぜ自分がパイロットに？」

「なんでって、そりゃ……適正？」

聞き飽きた、というニュアンスの含まれた視線をクレインは無視し、話し続ける。

「ま、選ばれちゃったんだし。細かいことは気にすんな」

「あなたがやれば良かったのでは」

「おいおい、勘弁してくれよ。人手不足のせいで、いろいろと軍人まがいのことやってるが、俺は軍人じゃない」

「似たようなものでしょう。それに、さっきの戦闘だって……」

言いかけて、その言葉は意味を成さなかった。

「やっと見つけた！ データの見直しささと……って、どちらさん？」

アリサだった。蹴破るような勢いで扉を潜り、早足でクレインへと言い寄った。

「3日もここに居るのに挨拶もしてないのかよ、お前」

「私は忙しいの！ で、この人は？」

びしっ指を刺して言い放つ。アリサの辞書に失礼という言葉は無いらしいな、とクレインは暗鬱な気分になりながらも少年を紹介した。

「こいつは、スウェン・カールスレント少尉。リベリオンのパイロットだ」

数秒間、アリサは固まり、そして弾かれたように声を上げた。

「この子が、冗談でしょ!？」

アリサが抗議の目を向けてくるが、それを肩をすくめて受け流す。
「この子って、あんたこそ誰なんだ？」

年下に見られたことが感に触ったのか、瞳には僅かな敵意が見て取れた。

「まあ、気持ちは分からんでもないが、こいつは俺と同年だ」

その言葉にこの世の終わりでも見たような絶望的な瞳を向けた後、それは哀れみの瞳へと移り変わる。

「万年153で悪いかああ！ 伸びねえんだよお、コンチクショ
ー」

「まあ、そういうわけだから。あと、こんなんでもうちのボス……社長なんだ。そんでついでにリベリオンの設計者でもある」

「こんなんとか言うな！ 減給よ！」

などと怒り狂うアリサに。驚きからか目を見ひらいたのは一瞬、いつもの無表情へと変わる。

「……」

「何よ!？ あんたもなんか文句あんの！」

食って掛かるアリサを「どう、どう」とクレインがなだめ、話題をそらす。

「そついえば、なんか用事で来たんだろ？」

言われ、ハツと思い出したようにアリサは口を押さえた。

たった今、シミュレータによる模擬戦を終えた二人に向けて、
「今から、模擬戦をやりなさい！」

そう、命令した。

そこはネビリムの艦橋だ。艦自体はドックに曳航してあるが、観測するにはこの上ない設備が整っている。

一方の2人はいくと、コックピットでそのときを待っていた。
一定の距離を置いて配置された2機のCM。シミュレータではな

く実機による模擬戦だ。

2機が手にしているのは観測用のライフルとサーベルだ。トリガーを引けば信号が放たれ、それによって攻撃判定が行われる。命中判定が出れば機体の運動制御プログラムにロックがかかり損傷を再現するというシステムらしい。

らしいというのも、実際に運用するのはこれが始めてのようで、ほとんど骨組みだけだったものをこの数日でアリサが完成させたらしい。

「両機、配置完了」

オペレーターが告げ。アリサが開始の合図を出した。

同時に、スウェンとクレインが機体を加速させ距離を縮めていく。スウェンは接近するクレインのシユタールに狙いを定め、発砲。データ上のビームが放たれ、それがクレイン機へと伝達される。

警報。

システムは正しく動作し、クレイン機のcockピットでアラートが響いた。操縦桿を操り、回避機動を行う。同時にライフルを構え発砲。半ば目くら撃ちであるが牽制にはなる。

スウェン機のcockピットでも警報が響き、スウェンはスラスタを吹かした。

スウェンの乗るリベリオンはクレインのシユタールと比べて肉付けされたイメージを与える。人間で言うならばシユタールは痩せ型で、リベリオンは中肉中背といったところだろう。カラーリングは白で、宇宙に浮かぶその姿は、暗闇に浮かぶ幽霊をイメージさせる。相手の機動を予測し、ライフルを放つが、広い宇宙空間で命中させるのは困難なことだ。従来までの機体の運動性ならばともかく、新型機同士というこの状況ではそれが顕著だった。

わずかばかりの射撃戦は直ぐに終わりを迎えた。

2機はスラスタを吹かして加速。ぶつかるような機動で接近していく。

抜刀し、交差。侍の居合い切りの格好で2機が刃を振るう。

両機のディスプレイには『negative』の文字が浮かび、命中していないことを示す。

2機が反転。再び刃を振るう。衝撃がコックピットを揺らし、2機は鍔迫り合いの格好となった。

「コラ！ あんたたちもう少し機体を大事にきなさいよね！」

通信機から聞こえてくるアリサの怒声も2人の耳には入らなかった。

「！？」

放たれたのは蹴りだ。スウェンは驚きながらもそれを腕で防ぎ、剣を振るう。四肢を持つCMには機械という常識は通用しない。人の延長線上にあると考え、人が行うであろう動作には常に注意しなければならぬのだ。

僅かな遅れ。蹴りによって意表を突かれたスウェンの振りには、わずかに遅れていた。身を翻すように距離を詰められ、回転切りが彼を襲った。

『effective』

有効を示す文字が画面に浮かび、一瞬遅れて『you loss』の文字がスウェン機へと表示された。

流石に『game over』とは表示されなかったが、どこかゲームチックなシステムにアリサらしさを感じ、クレインは通信を開いた。

「いつそゲーム開発部でも作ったらどうだ？」

「それは良い考えね。実機顔負けのシミュレータでも売り出そうかしら」

などと、ノってくるあたり良いデータが取れたのだろう。先ほどの怒声を無視していたため内心ひやひやしていたクレインであったが、杞憂に終わりそうだと安堵する。

「それで、スウェン君や」

「なんですか」

「射撃の精度も高いし、反射も判断も良い。だが、君の動きは模範

的過ぎる」

実戦では誰もが生き残ろうと必死だ。どんな手段を使ってくるか予想できない。確かに軍の教科書にのっている基本的な機動戦術は大事であるが、状況に合わせた臨機応変な動きが戦場では生死を分ける。今のスウェンがそうだったように――。

「了解」

答え、スウェンは通信を閉じた。

「模範的か――」

そういわれても彼にはピンと来なかった。彼は孤児だった。それは別に珍しいことではない。統一政府が樹立されても、紛争、飢餓、貧困は消えていない。読み書きさえ出来なかった自分を拾い、生きるすべを教えたのは軍だ。たとえそれが模範的だと言われても、彼はそれ以外のことを多く知らなかった。

同時刻 統一連合宇宙軍管轄区 コロニー ロノウェー 港安管理局

「船？ どの所属だ」

「わかりません。応答なし」

港の管理を行う管制室は喧騒に包まれていた。

「不明船より、電磁妨害！？ ジャミングです！」

「なんだと！？ 明らかな戦闘行為だぞ！」

蜂の巣でも突いたような騒ぎは管理局全体へと直ぐに伝播していく。

「防衛部隊にスクランブル！ 全力で防衛に当たらせろ！」

苦虫を噛み潰したような顔で司令官の男が怒鳴り、警報が鳴り響く。

すぐさま防衛を担う機動部隊に命令が下され、防空艦3隻、駆逐艦2隻、巡洋艦1隻からなる艦隊が出航する。また、それに搭載された艦載機を含めた36機のCMも順次発進準備を進めていく。

そしてその情報はネビリムへも伝えられていた。

「敵襲!？」

アリサが怒鳴るようにその知らせを繰り返した。

「どうするかね？」

シェパードの問いにアリサは一瞬、躊躇うような表情を浮かべ直ぐにそれを消し去った。

「逃げましょう。うちの社員は直ちに重要区画から退避を始めさせ、データのバックアップの完了と同時に重要区画を爆破します。その後、わが社の社員は敵へ降伏し出来る限りの時間稼ぎを行わせます。一部の機密は漏れるでしょうが、機体とこの艦のデータは絶対渡すわけにはいきません」

「最もなご意見だ。この艦のステルス性を最大限利用すれば、防衛部隊が時間を稼いでいる間に隠密航行で離脱も可能でしょう」

「では、直ちに出港準備に入ってください。あいつらにも直ぐに戻るように伝えて」

前半はシェパードへ向けて、後半はミラへと向けてアリサはそう命じた。

「了解です」

ミラがそれに応じて、スウェンとクレインへの通信回線を開き、状況を伝えた。

だが、

「え、あの……ちょっと」

ミラの戸惑う声が聞こえ、気になったアリサは通信へと割り込んだ。

「どうしたの？」

「そ、それが」

「離脱には賛同できない」

クレインの言葉にアリサの頭へと血液が集まっていく。

「あんたなに言ってるか分かってるの!？」

「ああ、もちろんだ」

「まさか敵に降伏しろとも言っんじゃないでしょうね!？」

「そんなわけがないだろう?」

「じゃあどうするっていうのよ!」

全ての音を消し去るような勢いでアリサが叫ぶ。

「迎え撃つ」

静かに発せられたスウエンの言葉。それが、さらにアリサの神経を逆撫でする。

「ふざけないで! そんな戦力はないわ!」

「あるじゃないか、ここに」

「リベリオンとシユタールの性能ならば実行は可能です」

「失敗したらどうするつもりよ!？」

「ここで失敗するようならこの計画がそもそも破綻しているだろう? 俺たちは戦局を変えうる機体を開発しているんだからな」

「それは完成したらでしょう! シユタールはともかくリベリオンはまだ……」

そこまで言つて、残りは言葉にならなかった。それ以上は最重要機密に該当する。まだ、話すわけには行かない。

「基本フレームは完成してるんだ。少なくともシユタールと同等のスペックはあるはずだろ」

「フリゲート2隻を沈めたと聞いたが?」

「あの時とは状況が違っわ!」

「離脱に失敗した場合は今より状況が悪くなるぞ」

「そんなのやってみなけりゃわからないじゃない! 万一のときはまた判断を下すわ!」

「そっだな、やってみなけりゃわからないんだ」

「!？」

「今ならまだコロニー守備隊との共闘も出来る。そこまで分の悪い賭けじゃないはずだ」

アリサは肩を震わせていた。本心を言えば施設を放棄などしたくはない。ここには、自分の部下が居て、友人もいる。そしてその友

人にだって友人がいるのだ。そうやって人と人は繋がっている。そのつながりを自分が壊そうとしているのは辛かった。それでも、アリサは感情を押し殺し、その決断を下した。

プロジェクトの責任者として、この会社のトップとして――。

「俺たちが時間を稼げば職員の脱出だって出来る。たとえ結果は最悪でも、データが届けば開発は続けられる」

「最悪な結果になんてならないわ」

うつむいていたアリサが顔を上げる。

「私の作った機体が負けるわけじゃないじゃない！」

アリサは考えを切り替えた。

本当に守るべきは、物なんかじゃない。自分は何のためにこの機体を設計し開発したのだ。

「ライフルを射出するわ、受け取りなさい。準備が整い次第、ネビリムも向かうわ」

『いいわよね？』という視線をシェパードへと送り、シェパードがそれに対し、

「総員第一種戦闘配置！」

という台詞で答える。

「借りるわね」

断り、アリサは奪うように端末を操作する。

「私よ、ACBRを2挺射出して。あと、予備のカートリッジも忘れないで、よろしく」

通信を終えたアリサは、

「艦長、あいつらをお願いします」

それだけ言い残し、アリサはブリッジを後にした。

「私にだって出来ることがある」

自分に言い聞かせるように彼女は呟くとコロニー内の施設へと向かっていった。

「第007分隊交信途絶」

「防空艦キツシュ轟沈」

「第一次防衛ライン浸透、第二ライン形成開始」

「駆逐艦デュケーン、小破。後方へ」

「第4小隊が全滅。第6小隊が穴を埋めます」

港安管理局の管制室では絶望が広がっていた。戦闘を開始して十数分。コロニー守備隊は圧倒的な劣勢へと追い込まれていた。前線の部隊からの報告によれば、敵は白狼（ヴァイスヴォルフ Weiß wolf）と呼ばれるヘルシャフト皇国の最精鋭部隊だった。

「全機、狩りの時間だ！ 突撃っ！」

ヴァイスヴォルフ

白狼達を束ねる部隊長のレオンハルトが命じ、部下達の「了解！」の声が重なる。

ディスプレイ画面に映るのは多数の敵機と戦闘艦だ。

雨のように放たれる対空砲火。その隙間を抜けながら白き狼達は、その牙を剥いた。

照準が統一宇宙軍の主力CM、フラジールを捉えるや、火を噴いた。モードは3点バースト。瞬間的に3発の弾丸が放たれ、フラジールの華奢な装甲を貫いた。

火を噴きながら虚空へと散っていく敵機を一瞥もせずに、レオンハルトは次なる獲物へと牙を向ける。

彼等が白狼と呼ばれる所以は期待の色とそのエンブレムだ。レオンハルトの駆るベリアルは白いカラーリングが施され、肩に描かれた白い狼はそのレオンハルトの活躍を、戦場を駆け抜ける白い狼に喩えて描かれたものだ。

そして、いつしか彼の元へは腕利きが集められるようになり、ヴァイス白狼隊が結成された。

ヴォルフ

味方にとってはこの上ない希望を与え、敵には絶望を与える。それが白狼隊だった。ヴァイスヴォルフ

そして、今日もまたその狼によって敵達^{えもの}が屠られていく。

戦況は圧倒的だった。前面に展開していた防空艦を沈め、レオンハルトは接近する機影を捉えた。

—— 敵を落とした瞬間が一番危険なのだ。—— ヘルシャフト
皇国 軍事教本より。

フラジールがライフルを発砲する。スラスターを噴射。掠めた弾丸が装甲で火花を散らす。

「詰めが甘い！」

彼の機動は絶妙だった。危険な物だけを回避し、余計なものはベリアル^{ベリアル}の装甲を以って弾く。機体のコンセプトをそのまま体現した戦い方だ。細い簡素なシルエツトがディスプレイの中心へと重なり、弾丸を喰らい弾ける。

その間にも、味方機が次々に敵機を沈め、駆逐艦を巡洋艦を戦闘不能へと追い込んでいく。

だが、そこで異変が起こった。

「隊長、何かが……うわぁっ」

部下からの通信が途切れ、レーダに移っていたマーカーが消滅する。

「ノエル、ボウマン。私に続けっ！」

部下に命じ、レオンハルトはスラスターを吹かした。

「早いな」

ディスプレイに映る光点が異常なまでの速度で動いている。レオンハルトはそれがフラジールとは思えなかった。

「新型？」

考えて、レオンハルトは困むような機動で接近するように伝える。
「油断するなよ！ 突撃！」

ペダルをいっぱいまで踏み込み最大加速をかける。押しつぶされそうにながらも、彼は奥歯をかみ締めてディスプレイを睨み据えた。

発光。同時に脇を光線が横切る。

「粒子ビームか！」

言って、彼は嫌な感じを覚えた。

「ノエル、ボウマン回避だ！」

気がつくとも直感的に叫んでいた。

再び発光。ボウマンの乗るベリアルが光の球へと包まれる。

「ノエル！ 敵はビーム兵器を持っている。距離を詰める、このままでは不利だ！」

叫び、レオンハルトは敵機に向けて突撃した。

放たれる光の弾丸。それをレオンハルトはぎりぎりのタイミングでかわし、距離を詰めていく。精度は確かに高いが、射線自体は読めないものでもない。一方のノエルも危なげな動きでこそあるが、かなりの速度で距離を詰めていた。

「距離さえ詰まれば！」

戦術鉦を引き抜くと同時に、デイスプレイに白い敵機のシルエツトが浮かび上がる。放たれた閃光が先ほどまでいた空間を貫いていく。

「お前も白かつ！」

叫び鉦を振り下ろす。白い敵機……リベリオンは後方へと下がるようにそれをよける。

「ノエル！」

そこへノエル機が散弾砲を撃ちかける。連携は完璧だった。だが、その第二撃をリベリオンは爆発的な加速によって回避する。

チャンスはピンチへと変わっていた。

回避したと同時に、硬直したノエル機へと、その銃口が向けられる。

「——ッ!?」

迸る閃光。続いて通信機から聞こえるノエルの悲鳴。

「これ以上は、やらせん！」

レオンハルトは背部のアタッチドアームズ（attached arms＝付属された腕）を駆動させ予備として携行していたバズ

「力を腰だめで発射した。それに平行して右腕のアサルトライフルもフルオートに切り替え乱射する。その猛攻にリベリオンは距離を取るように後退せざるを得ない。」

反撃の暇を与えぬ内に、ノエル機へと接触。回収を図る。鉈を腰部へと収納し、アタチドアームズによる牽制射撃を続けながらレオンハルトはリベリオンから離れていく。

「隊長！ トッドとニコライもやられた。このままじゃ全滅しちゃう」

レーダーにはもう1機の高速で機動する敵機を捉えていた。切羽詰った様子で呼びかけてくる部下の声に、レオンハルトは即断する。「退却する。全機、直ちに戦闘宙域から離脱せよ。合流はポイントD3。各機の健闘を祈る！」

命じ、レオンハルトも離脱を図る。あれほどの機動性だ、振り切るのは容易ではない。抱えたノエル機を投棄すれば見込みもあるだろうが、それは絶対に駄目だと理性が叫んでいる。バズーカの残弾が0を示し、自動で廃棄される。刹那、側面を光線が通り抜け、前方に漂っていた破片に当たり、爆発を生む。警報は鳴りっぱなしだ。思わず壊しそうな衝動に駆られるが、それをぐつと堪え、レオンハルトは回避に集中した。

それは永遠とも思えるような時間だった。

だが、悪夢から覚めるように、その時間は終わりを告げた。

「損傷確認、左腕、右脚部をロスト。頭部に小規模の損傷、か」

部隊の合流ポイントへとたどり着いたとき、彼のベリアルは満身創痍といった状況だった。

「生き残ったのはこれだけか」

無事に合流ポイントへとたどり着いたのはレオンハルトとノエルを除いてわずかに3機だけだ。出撃時は18機だったことを考えると13機が未帰還ということになる。

「隊長……」

憔悴した部下の声がレオンハルトの胸を抉る。

「我々はこれより、アプキールへと帰還する。各員いいたいこともあるだろうが、今は堪えてくれ」

レオンハルトの言葉に対して、疲労と様々なものを失ったことの反動からか誰も何も言わなかった。レオンハルトはそれをどこかでありがたく感じつつも、両肩にのしかかる重圧にただ拳を強く握り締めた。

統一連合宇宙軍管轄区 コロニー ロノウエー

戦闘を終えた港安管制室では歓喜が巻き起こっていた。失ったものも決して少なくはないが、今はまだ生き残れたことに対する喜びのほうが勝っているのだろう。誰もが安堵に胸を撫で下ろし、生きていることを確かめ合っている。だが、喜んでばかりいられない者たちもいた。

「よくやったわ。おかげでうちの損害は皆無。これだけの戦闘データが取れたことを考えればお釣が来るわ」

びしっと指を刺してアリサが宣言する。だが、その顔に緩んでいる様子はない。むしろその逆だった。

ネビリムのブリーフィングルームにはアリサ、クレイン、シェパードの3人がこれからについての話し合いを行うべく集まっていた。「今回はどうにかなったけど問題も山積みよ。敵に逃げられたわけだから、この計画が敵に露見したことになるわね」

「第二、第三の攻撃があるത്？」

「当然じゃない。私が敵の指揮官なら早急に部隊を再編して、再度攻撃に移るわ。それももっと大規模なやり方だね」

「ま、そりゃそうだよな」

肩を竦めてみせるクレインをアリサが睨みつける。

「艦長、本部との連絡はどうでした？」

「残念だが援軍は期待できん、上層部は及び腰だ」

「これだけの戦果を上げてても認めないのね」

予想していたのか、やれやれといった様子でアリサがため息をついた。

「戦力は常に不足しているからな」

「まあ、リベリオンのパイロットがスウェンに決まったのも前線の人員を割けないからってのもあったわけだしね」

アリサが頭を抱えるようにうなだれる。

「そんで、スウェンはどうしてんの？」

「自室で休ませてるよ、アイツにとってあれが初陣だし、考えてるよりも疲れてるだろうからな」

「そうだね」

そう言ったアリサの表情はどこか心配そうだ。

「まあ、通過儀礼もなかったし、精神的にはタフだよアイツは」
「だいたいけど」

アリサが話題を変えるようにスクリーンの画面を切り替えた。

「それでこれからの方針だけど、何か意見とかある？」

クレインの方へと視線を向けながらアリサが尋ねる。

「尋ねる相手俺かよ……艦長に聞けばいいじゃねえか」

「艦長にはさっき聞いた」

ため息をつくクレイン。

「そうだな、どうせ狙われるなら身軽なほうがいい。直ぐにネビリムを出航させて、どっかの部隊と合流するのが妥当じゃないか？」

「うわっ」

「なんだよ、うわって」

「クレインとかぶった」

心底嫌そうな顔をみせるアリサ。

「随分とひでえな」

「うそうそ、冗談だって」

笑うアリサに何度目か分からないため息を零しつつ。クレインはシェパードへと視線を向けた。

「私もそれに賛同している。気にすることはない」

「問題はどこで何処で合流するかですね」

「理想を言えば月の部隊と合流できれば最高なのだが、直行できる距離ではないな。途中、戦闘があることを想定すれば補給の問題もある」

「特に水はいくらあっても足りませんからね」

「なら……うん。いけるかも」

アリサは呟きながら手を叩くと、立ち上がった。

「艦の針路をコロニーヴィーネへと向けてもらえますか？」

「理由を聞いておこうか」

「あそこにはうちの支部がありまして、補給くらいならどうにかなるはずです」

それに……と一瞬言いよどみながらもアリサは続けた。

「確証はありませんが、戦力の補強も出来るかもしれません」

アリサの提案を暫く審議した結果、コロニーヴィーネへと向かうことが決まった。

また、先の戦闘で生き残ったコロニー ロノウエー配備の駆逐艦ボナパルトを半ば強引に編入し、同じく生き残ったCM6機も随伴させることが決まりわずかばかりの戦力が増強され、ネビリムは出航のときを迎えた。また、それ以外の職員は重要なデータの抹消後、救命艇とシャトルによって脱出する運びとなった。

「全ての準備整いました」

オペレータが告げ、艦橋^{ブリッジ}の緊張が高まる。

「厳しい航海になりそうだな」

そう言いながらもクレインの表情は明るい。

「ま、いざって時はあんた達に懸かってるんだからね」

クレインを指差してアリサが言い放つ。

「だがやり遂げねばならん」

しっかりとした口調でシェパードが締めくくり、副艦長のダリルが出航の命令を出した。

「これより、本艦は出航する。総員第2種戦闘配置！」

ネビリムの戦いはまだ始まったばかりだ――。

第1話 拮抗の崩壊（後書き）

第1話更新です！

大変です。大変でした。本当に。

なんかちょっとだけ俳句っぽい。字、余ってますが……。

書きたいシーンは頭に浮かぶのに、それが文字情報へと変換できないというバグが私の頭で起こっています。言い方を変えると致命的なエラーです。

今回から視点がちょこちょこ変わります。敵とか味方とかいろいろです。戦争物は書くこと多いんですね勉強になりました。

今回、戦闘シーンは控えめでお送りしています。本気で書く戦闘シーンだけで1話終わりそうだったので……。多分、2話の戦闘は濃いかも。別にプロットとか作ってないので完全に未定です。

私は、思い付きの精神を崩さないことをここに誓います！（笑）

ここで、次回予告っぽいものを――

出航したネビリムを追う白き狼の群れ。祖国のため、復讐のために再び狼が牙を剥く！

次回もお楽しみにしていただけると嬉しいです。

第2話 追うもの 追われるもの（前書き）

PDF及び縦読み推奨です。

レオンハルト・トラクスタン
ヴァイスヴォルフ

白狼隊を束ねる隊長。階級は少佐。卓越した操縦技術を持ち、部下からの信頼も厚い。ノエルのことを気にかけている。本作での敵側の主人公的なお人。

ノエル・スカーレット

ヴァイスヴォルフ 白狼隊の副官的な存在。階級は中尉。ヴァイスヴォルフ 過去にレオンハルトに戦場で命を救われたことをきっかけに白狼隊へと志願した。隊長であるレオンハルトには特別な想いを抱いている。本作での敵側のヒロイン的なお人。

シエパード・トラクスタン

ネビリムの艦長を務める。階級は大佐。一度、退役を決意したもののアリサの強い呼びかけにより、艦長となることを承諾した。ネビリムでは数少ないベテランの筆頭核。

第2話 追うもの 追われるもの

ヘルシャフト皇国所属 重巡洋艦アブキール

「つまりその新型に敗北したと?」

「遺憾ながら、その新型機は恐るべき性能を有しているようです」

レオンハルトの報告を受け、第3機動艦隊司令官のジャック・シユナイダー大佐は直ちに本国へと報告した。

「追加戦力は追って送る。現存の戦力を全て使い、これを殲滅せよ」
「かしこまりました」

通信が切れ、静寂が一瞬場を支配した。

「聞いていたな、レオンハルト」

「はい」

「ならば直ぐに部隊を再編しておけ」

ジャックの命令にレオンハルトは戸惑いの色を滲ませた。

「全ての責任は私にある。お前は今出来ることをやれ」

背中を向けたままジャックは強い口調で命じた。

「了解」

覇気のない声で答え艦橋^{ブリッジ}を去っていくレオンハルト。

「私も覚悟を決めねばならんな」

ジャックの呟きは艦橋^{ブリッジ}の喧騒の中に溶けて消えた。

統一連合宇宙軍所属 ネビリム

「第2種戦闘配置を解除。ネビリム、慣性航行へ」

コロニーロノウエーを無事に出航したネビリムは一路、コロニー
ヴィーネへと向かっていた。

「さて、ここからですな」

ダリルが一息つきながら、シェパードへと歩み寄る。

「そうだな。敵もいよいよ本気になるだろう。次は特にな」

今の平穩は嵐の前の静けさとも言うべきだろうか。彼等の表情は固く、険しい。

「だが、希望はある」

だが決して絶望したわけではない。このネビリムにはリベリオンとシユタールという強い力がある。

「戦争は若い者にばかり負担を強いる」

「だからこそ一刻も早く終わらせねばならん」

その言葉は過去へと向けられたもののようであつた。

薄暗い部屋で一人机に向かい、一心不乱にキーボードを叩いているのは小さな背中だ。

「あんま、無理すんなよ」

そんな、アリサの傍らにそっと差し入れの紅茶を置きながら、クレインは話しかけた。

「私は戦闘に出られないからね。こういうところで無理しないとさ」
言つてアリサは紅茶に口をつける。熱かったのか、一瞬口をつけて、びくつと遠ざける。

「だいたい、そこまで急ぐものあつたか？」

「あるわよ」

息を吹きかけて、もう一度口をつける。

「リベリオンはまだ完全じゃない。少しでも性能を、というか火力を上げないとシユタールと大差ないわ」

クレインはコーヒーカップを手にしたまま画面を覗き込んだ。

「腰部のランチャーか、確かにこいつなら火力は十分だな」

画面に表示されていた目がちかちかしそうな数字の羅列に圧倒されるようにクレインは離れていく。

「それにACBRのバスターモードの調整もあるし、今日は徹夜か

な」

「ま、倒れん程度にな〜おまえの看病とか勘弁願いたいからな」

「あんたの世話になんかならないわよっ」

空になったティーカップを投げつけられ、クレインは慌ててキャッチする。

「ナイスキャッチ。紅茶、おいしかった」

素直な微笑みを向けるアリサに、気恥ずかしさを感じつつ。クレインはアリサの部屋を後にした。

統一連合宇宙軍 月本部

「失礼します」

告げて、男は扉を潜った。長身のすらりとしたスタイルがすべりように進み、机の前でぴたりと止まる。

「ようこそ、カールス中佐。どうだね宇宙は」

にこやかな表情で口を開いたのは統一連合宇宙軍司令官のノーブル・アーロゲントだ。

「重要な任務だとお聞きしましたが」

「ああ。そうだね。とても重要だ」

口調は楽しげであるが、その表情からは不気味な何かが感じられた。

「君にはこれからヴィーネへと向かってもらう。そこであの船に合流してくれ」

「例の新型艦ですか」

「そうだよ。君にはバミリオンから新型が贈呈されるみたいだね」

「わかりました」

「それと、これを」

言って、ノーブルは引き出しから一通の茶封筒を取り出した。

「コードR？」

表紙には簡潔にそれだけが記されている。

「そう、ここからが本題なんだよ」

カールスへと向けられた表情は壮絶な悪意に満ちていた。

10月7日 0520 ヘルシャフト皇国所属 重巡洋艦アブリール

「まずは、状況から説明する」

壇上に立つジャックの声がブリーフィングルームへと集まったパイロットたちへと向けられる。

「連合宇宙軍の新型機が確認されたことは知つての通りだ。そして、その新型機が恐るべき性能を有していることも既に伝わっているだろう」

ジャックの後ろにあるモニターへやや荒い画像が、数枚映し出される。

「本国はこの事態を重く見ている。よって、失った戦力の補充を待たず作戦を決行することとなった」

モニターの画面が切り替わり、現在の戦力が詳細に表示される。

「当初の予定通り、先ほどベリアル一個小隊を含む補給が行われ、我々は現在、24機の機体を保有している」

画面のCMの部分が赤く強調され、拡大される。

「我々はこの戦力を以って、敵の新型機を鹵獲ないし破壊しなければならぬ。それには文字通り、諸君達の命を賭けてもらわねばならない」

さらに画面が切り替わり、光を放つ敵機の画像が表示される。

「敵はビーム兵器の携行化に成功しており、射撃戦に置いて圧倒的なアドバンテージを持っている。また、それを収束、形状保持を行った近接戦闘用の剣を有しており、近接戦闘においても高い火力は健在であるため、迂闊な行動は即、死に直結すると考える」

その場にいた誰もが、ジャックの言葉に圧倒されていた。

「これに対し、急場しのぎではあるが全機体に耐熱処理を施しているが、効果の程は実践して見なければわからない。くれぐれも被弾には注意せよ」

また画面が切り替わり、作戦予想図が映し出された。

「様々な情報をもとに検討した結果。2機の新型を同時に撃破することは困難であると判断し、今作戦では確実に1機を撃破することを目的としている」

画面が暗転。一拍置いて白い機体が映し出される。

「この機体は先日、レオンハルト少佐が交戦した機体だ。そして今作戦のターゲットでもある」

ジャックは咳払いし、続ける。

「まず先鋒となる先駆けて第23偵察隊が先行し、敵機をおびき出す。そこへ、我々の全戦力を以って、敵機を分断。第23偵察隊と共に、一個小隊が灰色の新型機を引き付け、そのまま釘付けにする。その間、レオハルト少佐率いる本隊が、ターゲットであるこの機体へと集中攻撃し、一気に沈めるという流れだ。完了後は先鋒部隊と速やかに合流し、直ちに戦闘宙域を離脱せよ」

ジャックの言葉を追いかけるように画面の作戦予想図が動いている。

「この作戦は今後の戦局にも影響する重要な作戦となる。各員の1層の奮闘に期待する！ 以上、解散！」

全員が一斉に立ち上がり、敬礼する。

ジャックの姿が完全にブリーフィングルームから消えるのを確認して、彼等は正した姿勢を解いた。

司令官の去ったブリーフィングルームはまるで先生のいなくなった教室のようにざわめきたった。渡されたデータに目を走らせる者や、仲のいい同僚と話す者と様々だ。だが、どの兵士達も共通して敵の新型について眉唾物のように捉えている節があった。現実を知

るレオンハルトはいたたまれずその場を立ち去ろうとした。

「隊長」

かけられた声に、レオンハルトは振り向いた。立っていたのは金色のショートヘアの女性。

「ノエル、傷はもういいのか？」

「あんまり良くはないですけど、寝てばかりもいられませんから」
そう言って、笑うノエル。鮮やかな紅い瞳がまっすぐに向けられ、レオンハルトは目を伏せた。

「助けていただきありがとうございます」

頭を下げるノエルを視界の端で捉えながら、レオンハルトは、

「気にするな」

と、短く答える。

「やっぱり気にしてるんですね」

そんなレオンハルトの心中を察してか、ノエルは一転して悲しそうな表情へと変わる。

「お前がそんな表情かおをする必要はない」

一瞬、伸ばそうとした手を理性で押さえ込む。

「私が今ここに居られるのは隊長のおかげです。少なくとも隊長は私を救ってくれました。だから、あまり自分を責めないでください」
温かい手がレオンハルトの手を包み込んだ。

「隊長は前だけを向いていてください。その背中が……いえ、私たちが守ります」

まるで柔らかな光が差し込むように彼の心へと染み込んでいく。
浮かび上がる失った仲間の顔。そのどれもが彼を責めてなどいないように思えた。それは、ただの甘えなのかもしれない。だが、莊思えた瞬間、まるで背中を押されたように、心が一步を踏み出していた。

「勝ちましょう。絶対に」

「勝つさ。そうでなければ、あいつらに合わせる顔がない」

きっぱりと踵を返して歩き出すレオンハルトの背中を3歩程遅れ

てノエルは追った。前を歩く背中に頼もしさを感じながら、同時に、危うさを感じ、密かな決意を固めていた。

10月7日 ヘルシャフト皇国所属 重巡洋艦アブキール

作戦開始は間近に迫っていた。事前の偵察によってあのコロニーに敵艦が既にいらないことは確認されている。内部施設も放棄されていたとの報告も受けていた。

ジャックは宙域図から彼等の針路を予想し網を張っていた。そして、その網に獲物は引つかかったのだ。

「全機、準備整っています」

部下が報じ、ジャックは頷いて視線を上げた。

「いよいよだな」

呟き、間髪いれずオペレータの声が上がる。

「敵艦と思しき反応を感知。数は1……いや2です！」

「2隻、間違いないか？」

その問いに込められた意味を悟ってかオペレータは端末に目を走らせる。

「熱紋照合、1隻は連合宇宙軍の駆逐艦と思われます」

「全機に通達。作戦に変更はない」

命じ、オペレータが「了解」の声をあげ、部隊へと伝達する。

「第23偵察隊より入電。『これより我々は作戦行動に入る』だそうです」

「返伝、『貴軍の健闘を祈る』だ」

「了解」

ジャックは心中で「始まったか」と呟くと、時計へと目をやった。現在時刻は、0752――。作戦開始まであと8分だ。

「新型はどうです？」

機体の調整を行っていたレオンハルトにノエルは声をかけていた。

「まだ分かん。新型といっても試作的なものなんだろう、これは」
「HCM-08 ナイトメア《knightmare》ですか。制式採用は見送られた機体だって、さつき整備士の方が言っていました」
「確かに基本スペックは高いが、癖がありそうだ。存外、お前のほうがこの機体には向いてるかもしれん」

「近接格闘戦闘用でしたっけ」

「らしいな。瞬発力と厚い装甲で切り込むらしい」

「でも重いんですよね？」

「確かに重量自体はベリアルよりも重いな」

「無理です」

きつぱりとノエルが答える。

HCM-08 ナイトメア《knightmare》は名前の示すとおり、外見は中世の騎士を思わせた。鋭角的な白い装甲と頭部の十字に刻まれた単眼が鎮座する様は、なかなか迫力があつた。だが、見た目に影響されてか性能のほうもかなり穿つたものになっているようで、量産配備されることはなかったのだが、実験的な試みも含めて、ちょうどこの白狼隊^{ヴァイスヴォルフ}へと配備が決まっていたらしく、先の戦闘で機体が中破し、修復と補充が間に合わなかったレオンハルトに急遽あてがわれることになった。

なお、機体の名前であるナイトメアは悪夢《nightmare》に騎士《knight》という意味を合わせた造語である。

「いよいよですね」

「そうだな」

コックピットのキーボードを叩きながらレオンハルトが答える。その顔にはハッキリと覚悟が滲んでおり、彼の強い意思が感じられた。

『総員、戦闘配置。繰り返す、総員、戦闘配置。パイロットは搭乗し、待機せよ』

艦内アナウンスが流れ、周りの空気が一気に引き締まる。

「勝ちましょう」

先ほども言った言葉を繰り返し、ノエルは自分の機体へと足を向けた。

「ノエル」

「はい？」

そんな背中にかけられた声。

「死ぬな」

「はい！」

明るく答え、ノエルは走っていった。

「敵フリゲート接近！ 数2」

「敵艦より熱源射出。CMです。その数6」

慌てるようにオペレータが報じ、シェパードは首をかしげた。

「数が少ない。索敵を厳に、他に反応がないか徹底的に探せ」

「はい！」

命じて、シェパードはクレインたちに発進を命じた。

「発進命令が出されました。よろしくお願いします」

こわばった笑顔を見せるミラに、クレインは「余裕」と軽く返す。

確かに彼は一度この状況を経験している。その場にはミラもいた。

「リベリオン、準備完了」

静かな声が、インカムから聞こえ、ミラは作業を続けた。そうだが、今回はスウェンもいる。それに味方だつて……。

「リベリオン、カタパルトデッキへ」

スウェンの乗るリベリオンがカタパルトデッキへと運ばれ、追う様にクレインのシュタールも第2カタパルトデッキへと運ばれていく。

「リベリオン、スウェン・カールスレント。発進する」

「シュタール、出るぞ」

2人が伝え、2機が漆黒の闇へと吐き出され、瞬く間に遠ざかっていく。

「どうか、無事で……」

回線を切って発せられたその言葉を、祈りを聞いているものはいなかった――。

迫り来るベリアルを撃ち抜いて、クレインは妙な違和感に囚われた。

「接近してこない？」

戦闘開始からおよそ5分。敵は今なお距離を保つように戦闘を続けていた。

「目的は艦ではないのか」

対艦攻撃を目的としているなら、是が非でもネビリムへと接近してくるはずだ。だが、この敵はまるでこちらを引き離すようにじっとしている。

「これは！」

瞬間、その答えが理解できたような気がした。同時に、敵の策にはまったことに舌打ちする。

放たれた弾丸を回避しつつ、クレインはライフルを撃ち返す。その射線を回避しながら、撃ち返して来る敵機に向けて、シユタールを加速させた。

一方で、スウェンの駆るリベリオンへも激しい攻撃が行われていた。ライフルの下部に装着されたグレネードがリベリオンの付近で炸裂し、機体を、コックピットを揺らす。刹那、見たことのない白い機体が青白く光る剣を振り下ろしてくる。

「ッ――！」

その一撃をとんば返りして避け、背中を見せた瞬間をライフルで狙う。だが、彼の僚機がそれを阻むように散弾砲で牽制し、照準が定まらない。スウェンは歯噛みしながら、機体を躍らせて次々に浴びせられる攻撃を慌しく避けながら、一瞬の隙については反撃を試みた。

目まぐるしく移り変わるディスプレイ画面に、敵のベリアルが移りこむ。反射的にスウェンはライフルのトリガーを引き、閃光が放

たれる。

次の瞬間には、腹部を打ち抜かれ、助けを求めるように手を伸ばしながら炎に包まれる敵機が塵と消える。それをゆっくりと見送るまもなく、次の1機がリベリオンへと切りかかってくる。それを抜き放った左手の光刃でいなしながら、逆手のライフルを別な敵へと向けて撃ちかける。その光条をかわし、別な1機が牽制射撃をかけてくる。スウエンは完全に包囲されていた。次々に波状攻撃が浴びせられ、彼は目まぐるしく機体を機動させてどうにかそれを凌いでいる。

一方のクレインはペダルを踏み込み、撃ち掛けられる弾雨を突き抜けながら、目の前の敵機に向けてライフルを連射する。

「ええい！」

沸き起こる苛立ち、付かず離れず一定の距離を維持しながら敵は執拗な時間稼ぎを行っていた。

「狙いはあいつのほうかよ！」

吐き捨てて、その苛立ちをぶつけるようにライフルのトリガーを引く。だが、回避を優先した敵機の機動に、むなしく虚を切り裂くばかりだ。

「ネビリム、そっちでリベリオンの救援はできないのかっ！」

通信機に叫ぶが、返事是否定的なものだ。3隻の敵艦を押さえるのでネビリムも手一杯なのだ。

「トールハンマー、てーえ！」

ネビリムの舷側から大型の対艦ミサイルが発射され、敵艦へと向かっていく。対して、敵艦から放たれた光条が、ネビリムの頭上を霞め、迫り来るミサイルの尽くをC I W S《近接防御機関砲》が叩き落していく。

「主砲照準！」

艦の2連装のビーム砲塔が旋回し、敵艦へと熱線を放った。

「砲撃来ます！」

「取り舵！ トールハンマーを！」

操舵手が舵を切り、ミサイルが吐き出される。ネビリムは3隻から放たれる攻撃を巧みにかわしながら戦線を支えていた。

戦闘開始から10分が経過していた。

「まだ落ちないのか？」

ジャックは焦る内心を押さえこみ、冷静に戦局を見つめていた。

「ターゲットはいまだ健在です」

手はず通りならば、もう撤退を行っているはずであった。無論、戦場で予定通りに行くほうが珍しいのは百も承知だが、それでもやはりもどかしさを感じてしまう。

「シエルブルー被弾！」

声に反応し、ジャックは反射的に左へと振り向いた。太い熱線が船体貫き、吹き上げる炎と共に最後の足掻きか、ミサイルと主砲が放たれる。次の瞬間には吹き上げた炎が爆炎へと変わり、一瞬にしてそれは残骸と化していく。乗員が脱出できた様子はなく、数百名の命が一瞬にして消えたことを意味していた。

「第23偵察隊のフリゲートをこちらに回せ！」

その現実には打ちひしがれる暇もなく、ジャックは次なる命令をすぐさま下していく。

第23偵察隊に所属するフリゲートは灰色の機体を押さえ込むように命じていた。そして、旗艦アプキールを筆頭とした第3機動艦隊 第4分艦隊の3隻が新造艦を押さえ込むという作戦であった。だが、1隻が沈んだ今、その穴を埋めなければ、敵艦がターゲットである白い機体へと支援行動を行う隙が生まれる可能性があった。

「第23偵察隊、2機撃墜」

「第6分隊被弾」

オペレーターの告げる情報はどれも友軍への被害を意味していた。これほどの状況に追い込まれても、敵は持ちこたえているのだ。その事実には驚嘆すると共に、恐ろしさもこみ上げてくる。ジャックは

ぎゅっと拳を握り締め、部下の勝利を信じ、次なる指示を出した。

「ボナパルト戦線へ入ります」

「ようやくか」

張り詰めていたネビリムの艦橋^{ブリッジ}に入った知らせに、シェパードはため息を漏らした。

コロニーヴィーネ所属の駆逐艦ボナパルトとその搭載機は当初、この戦闘への参加を拒んでいた。根見リムの艦長であるシェパードのほう^{ほう}が階級も上ではあるが、上級命令系統が別なのだ。彼等は彼等の上司の命令にしか従うことはない。シェパードが出せるのはあくまで要請であり、彼等は出来うる限りそれに答えるという自由意志があるのだ。

しかし、戦況が芳しくないと踏んでか、彼等も覚悟を決めたらしい。ネビリムが討たれれば次は自分達なのだと判断してか彼等は動き出した。

「これより貴艦を支援する」

「感謝する。まずは友軍機の支援を」

短い通信はそれで終わりを向かえ、ボナパルトに搭載されていた2機と、ボナパルトへと搭載できずネビリムへとやむなく搭載されていた4機のフラジールが発艦し、漆黒の世界へと飛び立っていく。まずはネビリムを抑える艦隊を狙うようだ。

これは一種の賭けだった。

「これで状況が変わるといいが」

シェパードの呟きは、一つの願いだった。開戦からこのフラジールと呼ばれる統一連合の主力機はベリアルに完膚なきまでに打ちのめされている。今こうして戦局を支えられるのは、研究によって編み出された戦術と、圧倒的な物量を使った消耗戦によるものだ。数の上での損害では連合のほう^{ほう}が、はるかに多い。

「リベリオン被弾！」

ミラの悲鳴にも似た報告が艦橋^{ブリッジ}へと響いたのはその時だった――。

リベリオンのコックピットで、スウェンは既視感に包まれていた。鳴り止まない^{アラート}警報、目まぐるしく動き回る敵機とディスプレイに移る景色。それら全てが遠い場所での出来事でもあるかのように感じられる。身体は反射的に正しい行動を取ってはいるが、思考がそれに追いついていかない。

「ノエル！」

聞こえるはずのない声が聞こえたような気がした。瞬間、ディスプレイの中心へと敵機が移りこみ、構えた獲物をこちらへと向けていた――。

「あのバカっ！」

ディスプレイに走らせた視界の端に捉えた光景に、クレインは思わず叫んでいた。動きを見れば分かる。スウェンはこの10分を超える極度の精神的な緊張に耐えられなかったのだ。訓練を重ねてきているとはいえ、スウェンはついこの間、初陣を迎えたばかりなのだ。

「邪魔だっ！」

払いのけるように光刃を振るい、スラスターを吹かした。幸いなことに、先ほど鬱陶しいフリゲートは離れている。それは好機だと思った。だが、クレインは目の前の出来事にとらわれすぎていた。いつもならばそんなミスはしなかったであろう。敵機の1機が死角へと回り込んでいたのだ。

^{アラート}
警報。

振り返れば、戦術鉈を振り下ろす敵機が迫っていた。

「くそっ！」

回避は間に合わない。迎撃も不可能だ。咄嗟に彼は左腕で頭を守っていた。それは単なる防御反応によるものだった。左腕の装甲に刃が食い込み、火花を散らす。接触の衝撃が機体を、コックピットを揺らし、機体の状況を示すディスプレイが赤く色づいた。

クレインはその態勢のまま、右腕のライフルの銃口を敵機の腹へと押し付けた。そのままトリガーを引き、光がベリアルルの腹部を撃ち貫いた。

クレインは、振りほどくように、沈黙したベリアルルを蹴り飛ばし、身を翻してリベリオンを目指した。

「不味い！」

声をあげ操縦桿を握っていた手を思わず伸ばしていた。

閃光。至近距離からリベリオンは撃たれた。ただ、その事実が視覚を通して、彼の脳へと送られる。

「モード変更、バスターモードを」

言うが早いかクレインはディスプレイを叩き、ACBRのモードをバスターへと変えた。

ライフルが中央から割れるように開き、伸びていた銃身が内部へと伸縮していく。だが、開いたライフルが閉じる様子はなく、まるで悪魔が口を開けたような状態となった。

「悪いなアリサ、今がそのときなんだ」

狙いを定めながら、クレインは呟いた。

ライフルの中央に膨大なエネルギーが内包されていく。チャージサイクルを限界まで落とし、ライフルが耐えられる限界まで溜め込んでいく。

ディスプレイに映るチャージ率が100%になるのを待たず、彼は敵中へと切り込んだ。

その瞬間、彼は勝利を確信した。

友軍、ノエルルの駆るベリアルルは確実に敵機の胴体へと散弾砲を撃ち込んでいた。彼の知る限り、至近距離からの散弾砲を受けて無事で済むものはない。重装甲をもつベリアルルでさえ深刻なダメージを追うことは必死だ。たとえ最新鋭機であろうとも、これならば思っていた。

「敵の反応！？ 上かつ！」

彼は直感で危険を感じ、見上げた。

煌く光刃、ノエルは咄嗟に散弾砲を盾代わりにして後退し、その刃から逃れていた。

白い機体の前に立ちふさがるように灰色の機体が止まっている。レオンハルトは一人、歯噛みした。これはつまり、作戦が失敗したということだ。分断に失敗した今、このまま戦闘を継続することは得策ではない。それを察してか彼の周りには友軍機が集まり、立ちはだかる灰色の機体とにらみ合いを演じている。

「白い機体の損害は不明であるが、未だ我々が有利であることに変わりはない、全機やれるな？」

それは確認だった。もとよりこのまま引けるはずがない。今ここで撤退を命じたとしても従うものなどいないだろう。それほどに、皆、何かを失いすぎていた。

その時、灰色の機体がライフルを構えた。光速の弾丸を警戒して、緊張が高まった。

「いや、違う……」

レオンハルトは感じた。アレはやバイ。戦闘中であるにも関わらず身体から熱が失われていくのが分かる。

「全機、離脱しろ！」

彼が叫んだ瞬間、それは放たれた。

『MAXIMUM』

ディスプレイにその文字が浮かび上がると同時に、クレーンはトリガーを引いた。

視界を覆う閃光が迸り、太陽が爆発でもしたかのように周囲一帯を照らし、虚空を貫いた。

出来事は一瞬の事だった。だが、一瞬で全てが変わっていた。放たれた閃光によって、敵機の大半が消滅。あるいは被害を受けていたのだ。

「全く、とんでもないものを作ってくれたな……」

驚愕し、息をつく。その瞬間、コックピットは暗闇へと包まれた。

片腕のままレオンハルトは突撃した。

HCM-08 ナイトメア《knightmare》には新しく開発された武装があった。

GLC-210 ハクアハトと呼ばれるプラズマブレイドだ。ビームほど高出力でない分、携行条件も低くなっている。

青白い光が発生し、刃を形成する。それは揺らめく青い炎のようにも見えた。先ほどの一撃を放った後、灰色の機体は動きをみせていなかった。レオンハルトにはそれが勝ち誇ったように見え、次の瞬間にはペダルを踏み込んでいた。

「貴様だけでもっ！」

叫び、レオンハルトは青き刃を振り下ろす。ありったけの憎しみと怒りを込めて――。

彼が目を開けたとき、真っ先に映ったのは灰色の機体だった。

「……！？」

次の瞬間、シユタールは青い刃に引き裂かれた。

「くそっ！」

毒づいて、スウエンは機体を駆動させた。手早く機体の状態をチェックし、改めて操縦桿を握り締める。胸部に損傷。だが、動かないわけではない。

既にスウエンは状況を理解していた。先ほどの自分の状況も含めて、だ。

スウエンは機体を起動させ、スラスターを吹かした。

突然、動き出したのは思わぬ奇襲の効果を生んだ。ほんの一瞬だが敵の反応が遅れ、無防備な側面を晒していた。内蔵された剣柄を握り、刃を展開させながら振りぬいた。しかし、その刃は、割り込んできたもう一機によって妨げられた。灼熱の刃がその左脚部を切り落とす。

脚部を切り落とされながらも、その敵は腰にあったハンドグレネードを投擲し、もう1機を掴むと、リベリオンから距離を取った。そのまま離脱を図る敵機を後から来たフラジールの部隊が追っていく。スウエンはとても追う気分にはなれなかった。機体の頭部を向けてシユタールを映し出す。胸部、コックピットの位置する場所に黒く焼け焦げたような損傷が見て取れる。今すぐこじ開けてパイロットであるクレインを救出することも出来るが、それ以上はスウエンには出来ない。スウエンはシユタールへと自機を近づけ、掴み緩やかな加速でネビリムへと向かった。

戦闘は終わりを迎えていた。

ボナパルトとその艦載機の働きによって、敵は後退を余儀なくされていった。

シユタールの放った一撃によって敵の機動部隊の大半は撃墜ないし戦闘能力を失っている。このまま戦闘を継続することは不可能だった。

「リベリオン、シユタール帰投します」

「医療班は至急格納庫へ」

素早く、着艦作業が行われ、損傷を受けたシユタールへと整備班と医療班が駆け寄っていく。

艦橋では最悪の結果を覚悟してか、勝利したというのに歓喜の雲^{ブリッジ}囲気など欠片もない。それでも、生き残れたという安堵感からか、ほつと胸を撫で下ろしているクルーは多い。

この戦いでネビリムは時間的な猶予を得た。少なくとも敵が戦力を回復するまでは安息の時が訪れる。

「ボナパルトへ打電。援護に感謝する。それと、直ちにヴィーネへ向かう。」

シェパードが命じて、宙域図へと視線を移した。ヴィーネへの旅はようやく半分を過ぎたといったところだ。敵の補給状況にもよるだろうが、彼等がもう一度仕掛けてくる可能性もなくはない。哨戒

している敵と会う可能性は、航路によってどうにかリスクを減らすことは出来るはずだ。

「艦長、よろしいですか？」

眉間に皺を寄せていたシェパードに話しかけてきたのは深刻な顔をしたアリサだった――。

第2話 追うもの 追われるもの（後書き）

第2話更新終了です。

読んで下さっているかた、ホントに感謝です！

書いたばかりで、手がいたいよ。（笑）それはそうと読みにくかったりしたら遠慮なく言ってください。出来る限り対策を考えます。

段々、自分でも混乱してきました。SFって管理大変だなあと思う今日この頃です。一応、いまだ設定資料なるものを作成し始めました。そんでもって3話ですが……ほんとどうしようかねえwwww

いまのところ白紙の白紙です。まっさらです。でも次回予告はあります。いま考えます。

予告――

戦闘を終えたネビリムと傷ついた戦士。目指すヴィーネはまだ遠い。勝利と敗北。白狼隊の動向は――。
ヴァイスヴォルフ

ティアーズレイン（Tears rain）第3話 望み

これから更新がんばります！

第3話 望み

ヘルシャフト皇国所属 重巡洋艦アブキール

「投入されたCMのほとんど、駆逐艦1、フリゲート1を失い。与えたのは損傷だけか」

「申し訳ありません。この責任は全て私に」
通信画面へと頭を垂れるジャック。

「責任の話など後だ。今は一刻も早くこの新型機をどうにかせねばならん」

ジャックの言葉を一蹴し、ヘルシャフト皇国皇帝のシュバルツはそう言った。

「直属を出せ。損傷を追わせた今ならば、圧倒的な戦力さえあればねじ伏せられるだろう？」

「はっ、ですが直属は本国の要。迂闊に動かすのは危険では？」

「問題ない。今はまだ統一連合にそれだけの戦力は存在しない」

確信に満ちた一言に、ジャックは言葉を失った。

シュバルツの読みはこれまでの確だった。確かに今の状況では統一連合側にもそこまでの余力はないはずだ。つまり、大きな戦力を動かせるのは戦局が膠着している今しかないのだ。

「増援は直ぐに送る。なんとしてでも連中を潰せ」

「畏まりました」

それで通信は終わりを迎えた。

統一連合宇宙軍所属 ネビリム

彼が目を覚ましたとき、そこは医務室のベッドの上だった。意識を失う瞬間のことを思い出して、クレインは自分が生きていることに驚きを覚えた。

「俺が生きてるって事はどうにかなったってことかな？」

側に現れた気配に向けてクレインはそう言ってみせる。

「ま、なんとかね」

「それはなによりだ」

「でも、問題が増えたわ。それも沢山」

ため息を零すアリサの目はまるで泣きはらしたように赤い。

「泣いた？」

わざとらしく尋ねてみせると、アリサはかっと目を見開いて手刀をクレインの腹へと落とした。

「すまんかった……」

呻きながら誤ると、今度は抱きつかれ慌てふためく。

「無事で、よかった」

「機体のおかげだ」

「当たり前よ、誰が造ったと思ってるの？」

離れたアリサは明るく笑っていた。

「それで、状況は？」

声が低く変わり、クレインはその話題を切り出した。

「機体はいま整備班が徹夜で修理中。リベリオン優先だけど、既にシユタールの作業も始まっている」

「シユタールの損傷具合はどうだったんだ？」

「コックピットを含む、胸部にやや深めの裂傷ってとこかな。運良く……というかあんたの悪運かは知らないけど、敵のプラズマソードが切った瞬間に消えてなかったら、あんたは今頃死んでたわ」

その言葉に、あの時の瞬間が、クレインの脳裏へと甦る。

「悪かったな機体壊して」

「気にすることないわ、戦場に出している以上こういうことは覚悟してたし」

でも、とアリサはにやりとしながらクレインへと詰め寄った。

「その責任で、家に帰ったら、罰として私にあそこのご飯を奢って貰うけどね」

ベッドから落ちそうになりながら、クレーンが講義の声を上げる。
「ほら、動かない。あんたはそれでもまあ重症だったんだから」
アリサに押さえつけられ、クレーンはそれに大人しく従った。

「敵の動きは……」

言いかけアリサに口を押さえられた。

「先のことは私たちで何とかするわ。あんたはまず身体を治しなさい」

告げてアリサは医務室を後にした。

「それで、次の作戦はどうする？」

シェパードの重い一言に、アリサは背筋を正して答える。

「次が最後でしょうね」

「だろうな」

既に彼等は多くの損害を出している。このまま引き下がってくれ
るはずがない。

「増援を呼んで、圧倒的な戦力差で潰しに来るでしょう」

ネビリムは孤立していた。最も近い統一連合の拠点まではまだ遠い。付近にあるのは民間に管理された中立のコロニーだけだ。ヴィーネもその一つだが、参入している企業の中に、たまたまアリサのVDT社があつたに過ぎない。ロノウエーは統一連合のコロニーだが、偏狭地であるため戦略的観点から今まで見逃されていたただ敵の目も欺きやすいが逆を言えば、何かあつたときに切り離される可能性もはらんでいる。

「今、シユタールの修理と平行して、リベリオンに武装の追加作業を行っています。これで少しはマシになるでしょう」

アリサの言葉に目を伏せるシェパード。

「ところで彼の容態は？」

「先ほど意識が回復しました」

「次の戦闘には？」

「無理でしょう。機体の方は何とかかなりそうですが、人の身体はそ

う簡単に治りません」

状況は最悪に近かった。作戦を立てようにも、動かせる戦力はあまりに少ない。分散させれば各個撃破されるだろうし、集中しても圧殺される。おまけに暗礁宙域など地形的利点もこの辺りにはない。暗澹たる思いに駆られながらも、彼等は一理の望みを探して考え続けていた。

「これが、リベリオンの追加武装か」

それを見たスウエンの反応は相変わらず薄い。だが、じっとそれを見つめる眼差しには強い何かが感じられる。

「そ、180mmの大型ビームランチャー。威力は保障するわ」

言ってアリサは書類を手渡した。

「マニユアルよ、一応読んでおいて」

「あの人は？」

スウエンの言うあの人が、クレインのことだと直ぐに分かった。

「問題ないわ。アイツは殺したって死にはしないから」

そっけなく答えるアリサ。それで納得したのか、スウエンはそれ以上にも言わなかった。ほんの少しの間、沈黙が訪れる。

「次の戦闘はあんた一人。やれるの？」

「わからない」

アリサの問いにスウエンはそう答えた。

「ま、そりゃそうよね」

答えなど分かっていた。返ってきた答えはやはり予想通りだ。だけど、アリサは言っただけだった。只一言、「大丈夫」だとか、「やれる」というような簡単な答えでもいい。肯定的な答えを期待して尋ねていた。

「でも、やらなければ死ぬんだろ？」

「そうね」

重い雰囲気立ちこめ、互いに視線を反らす。

「お願い。私にはそうとしか言えないけど、頑張っ」

静かに、アリサは願うようにスウェンにそう伝える。スウェンは静かに頷き、渡されたマニュアルに目を落としながら、機体の方へと歩いていった。

ヘルシャフト皇国所属 重巡洋艦アブキール

増援部隊の到着した第3艦隊の士気は高かった。ヘルシャフト皇国でも最強と名高い白狼隊ヴァイスヴォルフが数回にわたり敗北を喫した相手。その相手を打ち取ればその功績は大きいものとなるだろう。それだけではない。これだけの戦力を用意して行われる戦いに、パイロットはもちろんのこと、艦のクルーや整備兵たちにも自然と湧き上がるものがあつた。

「壮観ですね」

窓から覗く宇宙の景色。そこに並ぶ数々の艦船を見て、ノエルは純粹に色めいていた。

「そつだな」

対するレオンハルトの表情は暗い。それを見かねてノエルがこの場所へと誘ったのだが、彼はそんな気遣いにさえ気づいていない様子だ。「ほつといてくれ」だとか「一人にしてくれ」というようなオーラをこれでもかと発して訴えてはいるが、ノエルはそれを許さうとはしなかった。

「だめですよ」

「なにがだ？」

煩わしそうにレオンハルトが答える。

「隊長。あなたは自分が死んでも良いって、思っていますよね？」
「……」

「そんなのは絶対に駄目です。確かにここ数戦で私たちは多くの仲間を失いました。でも、それは隊長の所為とかじゃありません。立场上そうなるのは分かりますが、みんな戦場に居れば同じように死ぬ可能性ががあります。私たち兵士はそれを分かってここにいるんで

す。『誰かの所為で死んだ』なんてきつとみんな思わないはずです。純粋な瞳が向けられる。レオンハルトにはそれが、痛いように思えた。

「生きて、生き続けてください。犠牲となった仲間の分まで。それが生き残ったものの責任だつて私は思います」

ノエルは丁寧な頭を下げた。そして、

「隊長は死なせません。私が守ります。必ず……」

言い残して、その場を後にした。

一人残されたレオンハルトは、ぼんやりと宇宙の景色を眺めながら、ノエルの言葉を考えていた。

「これを自分に？」

「そうだ。本国……いや、皇帝陛下直々というほうが正しいな」

レオンハルトはジャックの執務室へと呼ばれていた。艦長であるジャックの部屋には自室のほかに、事務用と来客用を兼ねた、執務室がある。レオンハルトはその机の前に姿勢を正した状態で立っている。机の上には、一通の封筒と、ディスクが置かれており、封筒には皇帝陛下のサインが記されていた。

「直ちに機体を受領し、調整を行え。作戦開始時刻の変更は出来ない」

「……」

「さつさといかんか。お前の感情など作戦に持ち込むな。今は、命令に従え」

「了解」

レオンハルトは渋々といった様子で答えると、ジャックの部屋を後にした。

にのみ搭乗が許可された最新鋭にして、ヘルシャフト皇国における最強の機体である。ナイトメアを洗練したようなデザインは、スマートな騎士を思わせる。

先ほど、ジャックに告げられた皇帝陛下からの、勅命。それは、レオンハルトへの『ラウンズ』^{ヴァイスヴォルフ}権限のと、ベルフェゴールの授与というものだった。レオンハルトは白狼隊の隊長ということもあり、特例でその権限を与え、『ラウンズ』^{ヴァイスヴォルフ}でありながらも白狼隊の隊長という立場も維持する。という、少々複雑なものであった。

「俺の機体……」

見上げる先にはベルフェゴールが悠然と佇んでいる。レオンハルト用に調整されているらしく、期待の色も彼のパーソナルカラーである白へと塗装され、肩には狼のマークが施されている。このような状況でなければ、きっと名誉に酔いしれていたか、静かに喜べたことだろう。だが、今のレオンハルトにはそのような気持ちが沸くことはなかった。

そのまま、レオンハルトは整備班に言われるままに、機体の調整を行うと、シミュレートも行わず自室へと戻っていった。

統一連合宇宙軍所属 ネビリム

「敵艦隊、捕捉。重巡洋艦4、駆逐艦6、空母1」

「リベリオン発進完了。防衛位置へ」

「敵機動部隊。本艦を包囲するように展開中。数64」

「全兵装FCS連動中」

ネビリムではこれから始まる戦いの準備が着々と進められていた。「いい？ あくまで敵は圧倒的な戦力差による圧殺を狙ってくる。

包囲してこちらをじわじわと追い詰めてから本格的な攻勢に出る前に、一点突破を狙うしか、ネビリムに生きる術はないわ」

リベリオンのコックピットでスウェンはアリサからの説明を受け

ていた。

「あんたは兎に角後方から押し寄せる敵機を食い止めて頂戴。ネビリムは全火器を駆使して前進。この包囲からの脱出を試みるわ」
「了解」

スウェンは答え、レーダーへと視線を移した。ネビリムから転送された敵の光点が多数表示されている画面を見ると、どうしても絶望的な気分になってしまふ。敵の総数はおよそ60機。対するこちらは7機。そうなるのも、しょうがないというものだろう。

「こんなこと言うのもあれだけど、生きて……」

ふとかけられた言葉。どこか儚げな声に、スウェンは何かを感じたが、彼にはそれがなんなのかハッキリとは分からなかった。

「死ぬつもりなんてない」

「うん。頑張つて、それじゃ」

ジャックの号令を皮切りに、ヘルシャフト皇国艦艇は一斉に砲火を放った。粒子ビームの光が漆黒の宇宙をまるで戦いの始まりを告げる花火のように彩り、無数の機影が動き出した。スラスターの光が揺らめき、星の川のように流れ込む。続けざまにミサイルが斉射され、その川を追い越して、リベリオン、ネビリムへと殺到した。

ネビリムの対空砲火が作動して、その雨を撃ち落とし、虚空の闇を朱に彩った。多数の敵機が火線を放ち、一瞬にしてそこは地獄と化した。64対7。絶望的だが諦めるわけにもいかない。スウェンは殺到する火線の網を潜り抜けながら腰部に新しく装備されたランチャーを構えた。太い光の線が放たれ、散開した敵の足をもぎ取る。流石に敵もビーム兵器に馴れたのか、そうそう当たってはくれない。被弾した機体を庇うように、他の機体が援護に入り、追撃を防ぐ。スウェンは敵機との距離を保ちながら、前進を続けるネビリムの背中を守ることに集中した。

やはり、敵は闇雲に突っ込んで来ないようだ。長期戦に持ちこ

み、徐々に包囲を縮め、殲滅するという作戦のようだ。たしかに、リベリオンとネビリムに総攻撃をかけたとして、仮に沈めても相応の対価……いや、へたをすればそれ以上の対価を払わなければならぬ可能性もある。既に敵は多数の犠牲を払っている。出来る限り、これ以上の損害は避けたいのだろう。戦況が拮抗しているだけに、戦力の消耗は、戦局に直に影響を与える。それだけに敵も慎重だ。しかし、いつまでも守り続けていては数で劣るネビリムのほうは不利になる一方だ。いくらなんでも直衛機がフラジール6機では流石に不安すぎる。せめて、シユタールがいれば……とも思うが、いないのだからしょうがない。

いつ終わるとも知らない戦いのなか、スウエンは懸命に操縦桿を握り締め続けていた。

再び目が覚めたとき、艦は振動し、震えていた。確認するまでもなく戦闘中なのだろう。身を起こそうとして、左の腹部に激痛が走り、クレインは顔をゆがめた。最初に目を覚ましたときは感じなかったが、それは痛み止めの効果が残っていたのだろうと推測し、今度はゆつくりと身体を起こす。ぴりぴりと痛みが走るが動けないことはない。追加の痛み止めがないところを見ると、アリサが無茶を出来ないように、置かせなかったのだとなんとなく考える。たしかに、痛み止めが効いていれば、直ぐにでも外へ飛び出していたに違いないが、この程度では詰めが甘いとしか言いようがない。やるなら徹底的に、そう……筋弛緩剤くらい飲ませないと、クレインは諦めたりはしないのだ。

クレインは勝手に薬品の並ぶ棚を物色すると目当ての薬を見つけ、数錠ほど口へと放りこんだ。一応程度に覚えた薬品の知識がこのようなところで役に立つとは思っても見なかったが、とにかく今はこの艦を守らねばならない。クレインは腕に刺さった点滴の針を無理やり引き抜くと、急ぎ足で格納庫へと向かった。

パイロットスーツに着替えようと更衣室へと入ったところ、そこには思わぬ先客がいた。

「何やってんだ？」

声に驚いたのか方をびくつと震わせ振り返る。

「どうして……」

「それはこっちの台詞だ。何故お前がここにいるんだ、アリサ」

「それは……」

「しかも、その格好。なんでお前がパイロットスーツなんて着込んでる？」

強い口調だった。言い返す間も与えないような勢いでクレインはアリサへと詰め寄ると、耳元でこう言った。

「適正このお前じゃ役にも立たん、大人しく待ってる」

「ふざ……この機体を作ったのは……」

「そうだな、だが、動かしてるのは俺たちだ」

言って、クレインはパイロットスーツに袖を通し、なれた手つきで手早く着替えを済ませ、機体へと向かっていく。

「待ってるから」

背中にかけられた言葉に反応もなく、クレインはその扉を閉じた。

「クレイン・ウィルローフ。シユタール発進する！」

カタパルトによって宇宙へと投げ出され、彼は思いっきり、ペダルを踏み込んだ。ずっしりと懸かるGの重み。クレインにはそれが、最後にかけられた言葉の重みのように思えてならなかった。

警報。同時に視界に割り込む敵機。躊躇も慈悲もなく、クレインはトリガーを引き、敵を撃ちぬいた。作戦と状況はある程度ミラから聞いている。一部、出すぎた敵機もいるようではあるが、概ね距離を保ち包囲を維持しながら、機会を伺っているようだ。レーダーに目を走らせ、手薄なネビリムの前へと向かう。やはりフラジールには荷が重過ぎるようで、既に半数を割り込む2機しか残存して

いない。

舌打ちし、ライフルを連射しながら、クレインは戦闘へと割り込んだ。

友軍が突破された所為か、敵がやや前に出てきているようだ。突然現れた、シユタールに戸惑ったのか、距離を取ろうと動く。だが、その動きは迂闊すぎた。シユタールの放った光条が腕を吹き飛ばし、体制の崩れたところへもう1発が命中し、1機を屠る。クレインはすぐさま後退し、ネビリムの防衛に回る。その時、ネビリムに並走する形に位置している統一連合の駆逐艦が独断で加速を始めた。

「一体、なにやって……」

訝しげにその様子を視界の端で追いながら、クレインはネビリムから一定の距離を保ったまま、牽制射撃を続ける。

「限界だ！ 我々はこの宙域より離脱させてもらう！」

その声は、駆逐艦艦長のものだ。この状況に耐えられなくなったのだろう。フラジール隊も残すところあと2機だ。自分が先に沈められるか、かといってネビリムが沈めば、単独でこの状況を突破出来るはずもない。敵の目標がネビリムである間に、自分だけ離脱するという発想も分からなくもないが、それはもう少し戦力差が少ないときならば可能だったかもしれない。

ネビリムとシユタールの援護を失った、駆逐艦は当然の如く、敵の猛攻に瞬く間に沈められる。

「ミラ！ リベリオンも直衛に回せ！」

クレインが叫ぶように告げ、薄くなった対空砲火の隙間を突いてくる敵機へとライフルを放つ。同時に、ネビリムの対空ミサイルが放たれ、敵機は後退する。その代わりに、敵の対艦攻撃が放たれ、対空砲火を掻い潜った数発がネビリムを襲う。煙を吐きながらもネビリムは迎撃を続け、クレインもその防衛に奔走する。

「リベリオンはどうしている？」

「現在敵部隊と交戦中。苦戦しているようです」

クレインは直ぐに相手が白狼隊だと気づいた。ヴァイスヴォルフ恐らく対峙してい

るのは白い機体のパイロットだろう。厄介な相手なだけに、援護に向かいたい衝動にも駆られるが、そこはネビリムの防衛を優先し、クレインは一人、操縦桿を握りなおした。

「……ッ」

スウエンは奥歯をかみ締めながら、必死な機動で敵の攻勢を凌いでいた。ライフルと腰部のランチャーを放ち、後方から放たれる誘導弾を頭部のCIWSで撃墜する。目まぐるしく、動き回りながら、囲まれないように気を配る。極限の緊張で神経がどうにかなりそうだが、そんな暇さえ今はない。

正面から、白い機体が青白い刃を振りかざし、迫る。スウエンは空いていた左手で光刃を抜き放つと、その刃を受け止める。火花とスパークを散らしながら、2機は回転し、弾かれたように距離を取る。両機ともスラスターが唸りを上げ、再び切り結んでは距離を取った。

だが、スウエンに一瞬たりとも休む暇はない。

側面から別な敵機が、火線を放ち、先ほどまでリベリオンのいた場所を高速の弾丸が貫いていく。さらに警報。後方から散弾砲を持った敵機が迫り、銃口をリベリオンへと向ける。

銃口が瞬くと同時に、スウエンは機体をよじって、その射線かわす。お返しにライフルを向け、発射。命中は期待してしていないが、距離を取ってくればそれでいい。敵機は後方へと飛びのくように下がり、光弾を避けながら牽制の射撃を放つ。

「くっ……」

左から迫る青き刃。咄嗟に左手の光刃で弾くが、タイミングが悪すぎた。なんとか初撃こそ、防いだものの、その反動で機体の姿勢が崩れてしまっている。

「やられる」

そんな考えが脳裏を過ぎったとき、彼の身体は動いていた。

白い機体が2撃目を振り下ろす。その光景をはつきりと見ながらスウェンは、機体が弾かれた反動に逆らわず、足を蹴り出して後方宙返りを行った。瞬間的な機動であるため、姿勢制御は完全ではないものの、振り下ろされた刃は虚空を薙いでいる。

それは超人的は反射とししか言い様のない動きだった。

「……!？」

まさかだと、レオンハルトは我が目を疑った。完全な闇討ちだった。反射的な動作で一撃目を防がれこそしたものの、それはある程度は予想出来ていた。そして、体勢を崩した瞬間を狙っての一撃が本命だった。たとえ見えても体が追いつかないと踏んでの一撃。運が良くても重大な損傷はさけられないような、そんな一撃。前回のようには運良く、プラズマブレイドのエネルギーが切れるなどということはもうない。確実に目の前の敵機を葬る。その明確な殺意を持った一撃が、空を切っていた。その動き自体は雑で、あとの姿勢のことなど考えていないようなものだ。もし、次の一撃があればそれこそ終わり。そんな機動だ。

だが、レオンハルトは一瞬、気後れしていた。他の仲間も、半ば終わったと思っていただけに、対応が遅れている。その僅かな時間は相手に姿勢を整える時間となり、先ほどのまでの優位性は既に失われてしまっている。

そして、レオンハルトの脳裏に過ぎる目の前のパイロットの驚くべき成長速度への恐怖。このままではいずれ自分さえ超えるのではないか？ そんな予測が浮かび、彼は頭を振ってその考えを消し去る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5086x/>

ティアーズレイン（Tears rain）

2011年11月11日03時22分発行